● 授業科目の
内容紹介

音楽科専門教育科目

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽理論Ａ	**2**		**音**	**1**	**仲戸川智隆、和佐祐子**

Ⅰ　主題

音楽科の基礎知識である「楽典」を学習する。作曲家が楽譜に籠めたメッセージを読み取る力を養うことを目的とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.音程、及び音階、和音の把握
2.楽曲に於けるリズム、及び調性の把握
3.楽曲に出てくる楽語の習得

Ⅲ　授業の概要

授業で身につけた知識を実技レッスン等に反映させ、発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 定着度調査	到達目標に達していれば受験を免除する他、クラス分けを行う。
2. 音程Ⅰ	音の成り立ちや音程の種類を学ぶ。
3. 音程Ⅱ	音程の度数やその響きを学ぶ。
4. 音階と調Ⅰ	音階の成り立ちや調性を学ぶ。
5. 音階と調Ⅱ	調の性格、相互関係などを学ぶ。
6. 和音	和音の種類、役割や性格などを学ぶ。
7. 音名、音符、休符、譜表Ⅰ	変化記号の種類、派生音などを学ぶ。
8. 音名、音符、休符、譜表Ⅱ	様々な編成の譜表、調号などを学ぶ。
9. 拍子	主にリズム、様々な拍子などを学ぶ。
10. コードネーム	和音の簡単な進行、コードを学ぶ。
11. 調判定Ⅰ	今までの学習を通して調性を学ぶ。
12. 調判定Ⅱ	楽曲の調性判定が出来るように学ぶ。
13. 速さ・強さに関する楽語	楽曲の演奏速度、強弱の楽語を学ぶ。
14. 曲想・奏法に関する楽語	曲想、奏法に関する楽語を学ぶ。
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

新しい音楽通論　　菊本哲也著　　全音楽出版社　　9784118001807

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	70			30	
音程、音階、和音の把握	○			○	
楽語の習得	○			○	
調の把握	○			○	
その他基礎知識の習得	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

楽典−理論と実習−（著：石桁真礼生他　音楽の友社）、楽典－音楽家を志す人のための（菊池有石恒、著　音楽の友社）、を授業と並行して読む。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業の内容を知識としてのみ覚えるのではなく演奏実技に反映させること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽理論Ｂ	**2**		**音**	**1**	**和佐祐子**

Ⅰ　主題

この授業では、音楽の形式、つまり「楽式」を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.様々な音楽形式とその特徴を具体的に捉えられる。
2.音楽形式を通して、個々の楽曲がどのように構成されているか分析し、作曲家の意図などを追及できる。
3.各自がレッスン等で扱う作品の音楽的特徴に対する探究、理解が深まることを望む。

Ⅲ　授業の概要

楽曲がどのように作られているのか、さらに作曲家はそこで何を表現しているのかを音楽形式からひも解いていく。そのために必要となる『音楽理論　A』で学んだ楽典の知識の確認、音楽史と各時代の様式も交えながら授業を進めていく。また、幅広いジャンルの楽曲を取り上げ、様々な楽器の特徴（種目、音域など）にも触れる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 導入	「楽式」とは何か、主題・動機と楽節
2. 歌曲形式(1)	一部形式、二部形式
3. 歌曲形式(2)	三部形式
4. 複合三部形式(1)	複合三部形式とその特徴、《ト調のメヌエット》（ベートーヴェン）
5. 複合三部形式(2)	《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》（モーツァルト）
6. ロンド形式(1)	ロンド形式とその特徴、《エリーゼのために》（ベートーヴェン）
7. ロンド形式(2)	《ソナチネ》Op.20-1 第 3 楽章（クーラウ）
8. ソナタ形式(1)	ソナタ形式とその特徴、《ソナチネ》Op.26-1 第 1 楽章（クレメンティ）
9. ソナタ形式(2)	《ピアノ・ソナタ》Op.49-2 第 1 楽章（ベートーヴェン）
10. ソナタ形式(3)	《ピアノ・ソナタ〈悲愴〉》Op.13 第 1 楽章（ベートーヴェン）
11. 変奏曲(1)	変奏曲とその特徴、《ピアノ五重奏曲 イ長調〈鱒〉》Op.114 第 4 楽章（シューベルト）
12. 変奏曲(2)	《パガニーニの主題による狂詩曲》（ラフマニノフ）
13. その他の形式(1)	器楽曲の形式
14. その他の形式(2)	声楽曲の形式
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

新しい音楽通論　　菊本哲也 著　　全音楽出版社　　9784118001807

Ⅵ　参考書・参考資料

キーワード 150　音楽通論　　久保田慶一 編　　ARTES　　9784903951140

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	25		25	
音楽形式とその特徴の理解	○	○		○	
歴史的背景、様式の考察	○	○		○	
音楽形式を捉えた作品解釈	○	○		○	
楽典及び楽器の特徴の理解	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で得た知識を応用して、実技レッスン等で各自が向き合う作品のより深い理解と、新たな演奏の可能性を期待する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
和声学Ａ	**2**		**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

三和音の配置、機能、連結の把握。これらを把握することによって調性音楽作品の骨組みを知る。創った課題を弾くところまでを到達目標とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.和音を把握し、活用できるようになる。
2.和音連結の把握をし、活用できるようになる。
3.和音の転回形の把握をし、活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた知識を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 和声とは？	解説
2. 和音の配置	解説と課題の実施
3. 和音の連結Ⅰ（Ⅰ-Ⅳ-Ⅴ-Ⅰ）	解説と課題の実施
4. 和音の連結Ⅱ（Ⅱ-Ⅴ）（Ⅴ-Ⅵ）	解説と課題の実施
5. 和音の連結Ⅲ（Ⅱ-Ⅴ）、和音の機能、終止形	解説と課題の実施
6. 和音の連結Ⅳ	解説と課題の実施
7. 和音の連結Ⅴ	解説と課題の実施
8. 和音の連結Ⅵ	解説と課題の実施
9. 転回形（第1転回形）	解説と課題の実施
10. 第1転回形の連結	解説と課題の実施
11. 連結のまとめ	解説と課題の実施
12. 連結の例外Ⅰ	解説と課題の実施
13. 連結の例外Ⅱ	解説と課題の実施
14. まとめⅠ	
15. まとめⅡ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

はじめての和声学　　塚本一実　　echo publishers　　2014

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
和音の把握	○			○	
和音連結の把握	○			○	
和音の転回形の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

和声-理論と実習-Ⅰ（著:池内友次郎他、音楽之友社）を授業と並行して読む

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
和声学B	**2**		**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

属七和音の配置、機能、連結の把握。これらを把握することによって和声学Aに引き続き調性音楽作品の骨組みを知る。創った課題をなめらかに弾くところまでを到達目標とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.和音の転回形の把握をし、活用できるようになる。
2.すべての三和音の把握をし、活用できるようになる。
3.属七和音の把握をし、活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた知識を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. 前期の復習	基本形
2. 前期の復習	第１転回形
3. 第二転回形	解説
4. 課題Ⅰ	8小節程度の Bass 課題の解説と実施
5. 課題Ⅱ	8小節程度の Bass 課題の解説と実施
6. 属七和音	解説
7. 属七和音の基本形、第一転回形、第二転回形、第三転回形	解説
8. 課題Ⅲ	8小節程度の Bass 課題の解説と実施
9. 課題Ⅳ	8小節程度の Bass 課題の解説と実施
10. 属七和音の根音省略形	解説
11. 課題Ⅴ	8小節程度の Bass 課題の解説と実施
12. 課題Ⅵ	8小節程度の Bass 課題の解説と実施
13. まとめⅠ	
14. まとめⅡ	
15. まとめⅢ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

はじめての和声学　　塚本一実

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
和音の転回形の把握	○			○	
すべての三和音の把握	○			○	
属七和音の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

和声−理論と実習−Ⅰ（著:池内友次郎他、音楽之友社）を授業と並行して読む

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
和声学C		**2**	**音**	**2**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

属七和音、副七の和音、属九和音の配置、機能、連結の把握。これらを把握することによって和声学Bに引き続き調性音楽作品の骨組みを知る。完成させた課題の善し悪しを、鍵盤を使って確認するところまでを到達目標とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.属七和音の再確認し、活用できるようになる。
2.属九和音の把握をし、活用できるようになる。
3.副七和音の把握をし、活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた知識を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	前期の復習Ⅰ	三和音連結の復習
2.	前期の復習Ⅱ	属七和音の復習Ⅰ
3.	前期の復習Ⅲ	属七和音の復習Ⅱ
4.	前期の復習Ⅳ	属七の根音省略第二転回形の復習
5.	発表Ⅰ	既習和音を含んだ Bass 課題
6.	属九和音Ⅰ	解説と問
7.	属九和音Ⅱ	解説と問
8.	発表Ⅱ	既習和音を含んだ Bass 課題
9.	副七和音Ⅰ	解説と問
10.	副七和音Ⅱ	解説と問
11.	課題Ⅱ	既習和音を含んだ Bass 課題の実施と解説
12.	課題Ⅲ	既習和音を含んだ Bass 課題の実施と解説
13.	発表Ⅲ	既習和音を含んだ Bass 課題
14.	まとめⅠ	
15.	まとめⅡ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

はじめての和声学　　塚本一実

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
属七和音の把握	○			○	
属九和音の把握	○			○	
副七和音の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

和声−理論と実習−Ⅰ（著:池内友次郎他、音楽之友社）を授業と並行して読む

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
和声学D		**2**	**音**	**2**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

借用和音の配置、機能、連結の把握。これらを把握することによって和声学Cに引き続き調性音楽作品の骨組みを知る。借用和音等から、調性に対する意識を新たなものとし、音楽における和音に対する位置づけ、和声感を統括的に体得することを到達目標とする。シャラン 380 の課題の第3巻の実施。

Ⅱ　授業の到達目標

1.副七和音の把握をし、活用できるようになる。
2.準固有和音の把握をし、活用できるようになる。
3.副Ⅴ度の把握をし、活用できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた知識を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1. 前期の復習Ⅰ	属九和音
2. 前期の復習Ⅱ	副七和音
3. 課題Ⅰ：	既習和音を含んだ Bass 課題の実施
4. 準固有和音Ⅰ	Bass 課題の実施と解説
5. 準固有和音Ⅱ	Bass 課題の実施と解説
6. 発表Ⅰ	既習和音を含んだ Bass 課題
7. ナポリの和音	Bass 課題の実施と解説
8. ドリアの和音	Bass 課題の実施と解説
9. 長調の副五度	Bass 課題の実施と解説
10. 短調の副五度	Bass 課題の実施と解説
11. 発表Ⅱ	既習和音を含んだ Bass 課題
12. 借用和音の総括Ⅰ	Bass 課題の実施と解説
13. 借用和音の総括Ⅱ	Bass 課題の実施と解説
14. 付加六、付加四六の和音	Bass 課題の実施と解説
15. 発表Ⅲ	既習和音を含んだ Bass 課題

Ⅴ　使用テキスト・教材等

はじめての和声学　　塚本一実

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
副七和音の把握	○			○	
準固有和音の把握	○			○	
副Ⅴ度の把握	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

和声−理論と実習−Ⅱ（著：池内友次郎他、音楽之友社）を授業と並行して読む

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽史Ａ	**2**		**音**	**1**	**仲戸川智隆**

Ⅰ　主題

19 世紀初めまでの西洋音楽史を扱う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.西洋音楽史の概略を理解する。
2.世界史と音楽史との関連について理解する。
3.西洋音楽の様式の変化について理解する。

Ⅲ　授業の概要

視聴覚資料を用いた講義を行う。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.　古代から中世にかけての音楽について	～ギリシャ・ローマ神話、ピタゴラス～
2.　中世における音楽について	～宗教との関連～
3.　ルネサンス期の音楽について－1	～　ヨーロッパの発展が音楽に与えた影響～
4.　ルネサンス期の音楽について－2	～アルス・ノーヴァ、記譜法の発展、宗教改革の影響～
5. 前期バロック時代について	～器楽の世紀、オペラの発展～
6.　フランス・ドイツのバロック音楽	～ラモー、クープラン他～
7.　G. F. ヘンデルならびにG. P. テレマンの作品について	～後期バロックの隆盛～
8.　J. S. バッハについて	～その人生の歩みを中心に、オルガンを中心とした器楽作品～
9.　J. S. バッハの宗教曲について	～受難曲、カンタータ～
10.　バッハの息子達、多感様式ならびに前期古典派につい	～教則本の発展～
11.　古典派の音楽について	～ソナタ形式、交響曲、バロック期との関連性～
12.　J. ハイドンの作品と形式について	～弦楽四重奏、交響曲、エステルハージ家～
13.　W. A. モーツァルトについて-No.1	～その人生の歩みを中心に～
14.　W. Aモーツァルトについて-No.2	～作品に関して～
15.　まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

適宜授業内で用いる。

Ⅵ　参考書・参考資料

「新・西洋音楽史」中・下　グラウト/パリスカ　音楽之友社
「図解音楽事典」　U.ミヘェルス編　白水社
他　授業内で提示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	45		5	
西洋史における音楽史の関連理解度	○	○		○	
論理的な文章作成能力		○			
西洋音楽の形式・様式に対する理解	○				

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業時間内には楽曲を全て鑑賞することが不可能なので、授業で紹介された楽曲は可能な限り多くの鑑賞することが望ましい。授業の内容は早いので、終了後に各自でノートにまとめて復習をしておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

過度な私語など、授業に対して著しい進行の妨げを行った者に対しては、退出を命じる場合もある（その場合は欠席の扱いとする）。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽史Ｂ	**2**		**音**	**1**	**仲戸川智隆**

Ⅰ　主題
18 世紀末から 19 世紀末（一部 20 世紀初め）までの西洋音楽史を扱う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.西洋音楽史の概略を理解する。
2.世界史と音楽史との関連について理解する。
3.西洋音楽の様式の変化について理解する。

Ⅲ　授業の概要
視聴覚資料を用いた講義を行う。

Ⅳ　授業計画と内容
1. ロマン派の黎明～ヨーロッパの社会体制の変化を俯瞰しながら～
2. L.v.ベートーヴェンについて～その人生の歩みと作品の概略～
3. ロマン派音楽の概略について、パガニーニについて～ヨーロッパの社会体制の変化とその影響、ヴィルトゥオーゾ～
4. F.シューベルト～古典主義的ロマン派-1～
5. R.シューマン～古典主義的ロマン派-2～
6. メンデルスゾーン～古典主義的ロマン派-3～
7. ヴィルトゥオーゾ＆大管弦楽について～ベルリオーズ、ショパン、リスト～－1
8. ヴィルトゥオーゾ＆大管弦楽について～ベルリオーズ、ショパン、リスト～－2
9. オペラの発展～C.M.ウェーバー、イタリアのオペラ作曲家達～
10. R.ワーグナーについて　その人生、楽劇について
11. G.ヴェルディ　G.プッチーニ～イタリアオペラの最盛期～
12. J.ブラームスについて～その人生の歩みと作品～
13. A.ブルックナー、G.マーラー、R.シュトラウスについて～19 世紀末ウィーンの作曲家達～
14. 国民楽派について～民族主義的な音楽の発展～
15. まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等
適宜授業内で用いる。

Ⅵ　参考書・参考資料
「新・西洋音楽史」中・下　グラウト/パリスカ　音楽之友社
「図解音楽事典」　U.ミヘェルス編　白水社
他　授業内で提示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50	45		5	
西洋史における音楽史の関連理解度	○	○		○	
論理的な文章作成能力		○			
西洋音楽の形式・様式に対する理解	○				

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
授業時間内には楽曲を全て鑑賞することが不可能なので、授業で紹介された楽曲は可能な限り多くの鑑賞することが望ましい。授業の内容は早いので、終了後に各自でノートにまとめて復習をしておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
過度な私語など、授業に対して著しい進行の妨げを行った者に対しては、退出を命じる場合もある（その場合は欠席の扱いとする）。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽史Ｃ		**2**	**音**	**2**	**太田暁子**

Ⅰ　主題

印象派以降、現代に至るまでの音楽を歴史的に俯瞰し、知識を身につけることにより、音楽への造詣を深める。

Ⅱ　授業の到達目標

1.印象派から現代までの音楽の特徴を歴史的に俯瞰し、理解する。
2.印象派以降の楽曲が作られた当時の歴史的、社会的背景を理解する。
3.西洋音楽流入後、日本が受けた影響を辿る。

Ⅲ　授業の概要

テキストや参考文献などに沿って音楽の歴史を追う。鑑賞にも時間を割き、学生各自の専門以外の曲も含め、出来るだけ沢山の音楽に触れるようにする。単元ごとの区切りには小テスト方式のプリントを配布し、知識が身に付いているかを学生自らチェックできるようにする。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.印象主義とその周辺1	ドビュッシー　ラヴェル1
2.印象主義とその周辺2	ラヴェル2　サティ
3.ロシアの作曲家1	ラフマニノフ、プロコフィエフ　等
4.ロシアの作曲家2	スクリャービン、ショスタコーヴィチ　等
5.新ウィーン楽派1	シェーンベルク1
6.新ウィーン楽派2	シェーンベルク2、ベルク、ウェーベルン
7.原始主義とその周辺	ストラヴィンスキー　他
8.20世紀の新古典主義	第一次世界大戦とその影響
9.20世紀の音楽の諸相	その他　著名な作曲家とその作品
10.音楽への挑戦	偶然性・不確定性の音楽、ミニマル・ミュージック　等
11.ポピュラー音楽	ジャズ、ロック　等
12.舞台音楽の多様化	ミュージカルのいろいろ
13.日本における西洋音楽の受容	明治以降、日本の現代音楽まで
14.日本の歌謡曲	昭和歌謡史
15.まとめ	まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

音楽史〈作曲家とその作品〉	千倉八郎	教育芸術社	9784905700388
はじめての音楽史	久保田慶一ほか	音楽之友社	9784276110168

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	70	20		10	
ロマン派以降の様々な楽曲を知る	○	○		○	
音楽を歴史的な視点から理解する	○	○		○	
社会が音楽に与える影響を考える	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

教科書を読んで予習しておくこと。また復習用のプリントを配布する。
授業中に疑問に思ったことは、その都度解決するよう心がけること。
普段から自主的に沢山の音楽を聴くよう心がけること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

必要に応じて授業にて指示する。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
民族・日本音楽概説		**2**	**音**	**1**	**太田暁子**

Ⅰ　主題
様々な地域の音楽に触れ、理解することを通じて、音楽とは何かを考える。

Ⅱ　授業の到達目標
1.日本音楽と民族音楽の多種多様な楽曲を鑑賞し、特徴を概観する。
2.日本の様々な音楽や楽器について学習する。
3.世界の様々な音楽や楽器について学習する。

Ⅲ　授業の概要
様々な時代や社会を背景とした文化の中で、人はどのように音楽を奏でてきたのか。その様々なかたちを具体的に知ることを通じて音楽に対する視野を広げていき、延いては音楽とは何かを考えていく。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1 オリエンテーション　雅楽	管絃で使用される楽器について学ぶ
2 雅楽	管絃と舞楽について学ぶ
3 琵琶	日本の様々な琵琶について学ぶ
4 狂言、能	能舞台で行われる芸能について学ぶ
5 能	四拍子、謡や舞について学ぶ
6 箏	楽器の構造や奏法について学ぶ
7 箏、尺八	箏・尺八の歴史について学ぶ
8 三味線（地歌など）	楽器の構造とその音楽について学ぶ
9 三味線（歌舞伎、文楽）	舞台芸能における三味線音楽を学ぶ
10 明治以降の日本	西洋音楽受容後の日本について学ぶ
11 中央アジア・西アジア	シルクロードの音楽、楽器を学ぶ
12 東アジア、東南アジア	箏・琵琶などの音楽、楽器を学ぶ
13 南アジア	インドの音楽、楽器を学ぶ
14 その他の地域	アフリカ・ヨーロッパ等の音楽を学ぶ
15 補足、まとめ	補足、および復習と確認

Ⅴ　使用テキスト・教材等
授業中にプリントを配布

Ⅵ　参考書・参考資料
特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	70	15		15	
日本の伝統音楽の諸相を知る	○	○		○	
世界の音楽の諸相を知る	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
予復習用のプリントを配布する。
授業中で疑問に思ったことは、その都度解決するよう心がけること。
普段から自主的に様々な音楽を聴き、様々な文化に興味を持つように心がけること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
参考図書など、必要に応じてその都度授業中に指示。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽鑑賞Ａ		**2**	**音**	**1**	**高瀬健一郎**

小林秀子、仲戸川智隆、井上幸子

Ⅰ　主題

様々な楽器編成の音楽を聴き、楽器についての知識を増やし、
加えて一流の演奏で様々な時代の音楽に触れ、その様式感を培う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できる。
2.音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深める。
3.作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できる。

Ⅲ　授業の概要

作品の背景や形式等の特徴などの基礎的な知識について解説し、DVD や CD、演奏会などでその作品を鑑賞する。演奏会で実演を鑑賞する場合、1,000～2,000 円程度の料金が必要となる。

Ⅳ　授業計画と内容

―ジャズ―【井上】

1)	ジャズ音楽について①	ジャズ音楽の種類と特徴①
2)	ジャズ音楽について②	ジャズ音楽の種類と特徴②
3)	鑑賞①	DVD 等による鑑賞
4)	鑑賞②	DVD 等による鑑賞
5)	鑑賞③	DVD 等による鑑賞

―バロックの作品―【小林】

6)	協奏曲①	作品の概要と鑑賞。様々な楽器のための協奏曲
7)	協奏曲②	作品の概要と鑑賞。チェンバロ協奏曲と、協奏曲と名のついた独奏曲
8)	組曲	作品の概要と鑑賞。組曲、フランス風序曲
9)	変奏曲	作品の概要と鑑賞。ゴールドベルク変奏曲
10)	演奏鑑賞	演奏会における鑑賞（7/8 F.トリスターノＰリサイタル　1,000 円）

―管弦楽作品―【仲戸川】

11)	管弦楽法	古典派からロマン派かけてのオーケストラ作品の変化について
12)	交響曲	L.v.ベートーヴェン交響曲第 8 番について概説と CD 鑑賞
13)	交響詩	B.スメタナ交響詩「我が祖国」より ＜モルダウ＞について概説と CD 鑑賞
14)	演奏鑑賞	演奏会における鑑賞（7/2 静岡交響楽団定演 1,500 円）
15)	まとめ	演奏会についての事後解説。学生は感想レポートを提出する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

担当教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		20		80	
自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できた。		○		○	
音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深めた。		○		○	
作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できた。		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で鑑賞した作品以外にも多くの作品を聴き、その作曲家や作品についての知識を持つこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

特になし

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽鑑賞Ｂ		**2**	**音**	**1**	**高瀬健一郎、塚本一実、岩下晶子**

Ⅰ　主題

様々な楽器編成の音楽を聴き、楽器についての知識を増やし、
加えて一流の演奏で様々な時代の音楽に触れ、その様式感を培う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できる。
2.音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深める。
3.作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できる。

Ⅲ　授業の概要

作品の背景や形式等の特徴などの基礎的な知識について解説し、DVD や CD、演奏会などでその作品を鑑賞する。演奏会で実演を鑑賞する場合、1,000～2,000 円程度の料金が必要となる。

Ⅳ　授業計画と内容

―W.A.モーツァルトのオペラ―【岩下】
1) W.A.Mozart のオペラ作品①　作品の概要について
2) W.A.Mozart のオペラ作品②　歌詞対訳
3) W.A.Mozart のオペラ作品③　内容と音楽の関連性
4) W.A.Mozart のオペラ作品④　鑑賞①
5) W.A.Mozart のオペラ作品⑤　鑑賞②
―ピアノ協奏曲を中心に―【高瀬】
6) Mozart のピアノ協奏曲　ピアノの知識と協奏曲の形式（D-dur K537）
7) Beethoven のピアノ協奏曲　楽器の発達と形式の工夫（4番 G-dur Op.58）
8) ロマン派の作品①　（Chopin 1 番 e-moll Op.11）（Schumann a-moll Op.54）
9) ロマン派の作品②　（Grieg a-moll Op.16）（Saint=Saens 4 番 c-moll Op.44）
10) ロマン派の作品③　（Tchaiko3 番）（Rachma 3 番 Op.43）
―現代作品―【塚本】
11) 現代邦人作品を聴く①　黛敏郎のCD解説の熟読と音楽鑑賞
12) 現代邦人作品を聴く②　武満徹のCD解説の熟読と音楽鑑賞
13) 現代邦人作品を聴く③　三善晃のCD解説の熟読と音楽鑑賞
14) 現代邦人作品を聴く④　北爪道夫のCD解説の熟読と音楽鑑賞
15) 現代邦人作品を聴く⑤　西村朗のCD解説の熟読と音楽鑑賞

Ⅴ　使用テキスト・教材等

担当教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100		20		80	
自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できた。		○		○	
音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深めた。		○		○	
作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できた。		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で鑑賞した作品以外にも多くの作品を聴き、その作曲家や作品についての知識を持つこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

特になし

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽鑑賞Ｃ		**2**	**音**	**2**	**高瀬健一郎**

小林秀子、仲戸川智隆、井上幸子

Ⅰ　主題

様々な楽器編成の音楽を聴き、楽器についての知識を増やし、
加えて一流の演奏で様々な時代の音楽に触れ、その様式感を培う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できる。
2.音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深める。
3.作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できる。

Ⅲ　授業の概要

作品の背景や形式等の特徴などの基礎的な知識について解説し、DVD や CD、演奏会などでその作品を鑑賞する。演奏会で実演を鑑賞する場合、1,000～2,000 円程度の料金が必要となる。

Ⅳ　授業計画と内容

―ジャズ―【井上】

1)	ジャズ音楽について①	ジャズ音楽の種類と特徴①
2)	ジャズ音楽について②	ジャズ音楽の種類と特徴②
3)	鑑賞①	DVD 等による鑑賞
4)	鑑賞②	DVD 等による鑑賞
5)	鑑賞③	DVD 等による鑑賞

―バロックの作品―【小林】

6)	協奏曲①	作品の概要と鑑賞。様々な楽器のための協奏曲
7)	協奏曲②	作品の概要と鑑賞。チェンバロ協奏曲と、協奏曲と名のついた独奏曲
8)	組曲	作品の概要と鑑賞。組曲、フランス風序曲
9)	変奏曲	作品の概要と鑑賞。ゴールドベルク変奏曲
10)	演奏鑑賞	演奏会における鑑賞（7/8 F.トリスターノＰリサイタル　1,000 円）

―管弦楽作品―【仲戸川】

11)	管弦楽法	古典派からロマン派かけてのオーケストラ作品の変化について
12)	交響曲	L.v.ベートーヴェン交響曲第 8 番について概説と CD 鑑賞
13)	交響詩	B.スメタナ交響詩「我が祖国」より ＜モルダウ＞について概説と CD 鑑賞
14)	演奏鑑賞	演奏会における鑑賞（7/2　静岡交響楽団定演　1,500 円）
15)	まとめ	演奏会についての事後解説。学生は感想レポートを提出する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

担当教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		20		80	
自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できた。		○		○	
音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深めた。		○		○	
作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できた。		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で鑑賞した作品以外にも多くの作品を聴き、その作曲家や作品についての知識を持つこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

特になし

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽鑑賞D		**2**	**音**	**2**	**高瀬健一郎**

塚本一実、岩下晶子

Ⅰ　主題

様々な楽器編成の音楽を聴き、楽器についての知識を増やし、
加えて一流の演奏で様々な時代の音楽に触れ、その様式感を培う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できる。
2.音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深める。
3.作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できる。

Ⅲ　授業の概要

作品の背景や形式等の特徴などの基礎的な知識について解説し、DVD や CD、演奏会などでその作品を鑑賞する。演奏会で実演を鑑賞する場合、1,000～2,000 円程度の料金が必要となる。

Ⅳ　授業計画と内容

—W.A.モーツァルトのオペラ—【岩下】

1) W.A.Mozart のオペラ作品①	作品の概要について
2) W.A.Mozart のオペラ作品②	歌詞対訳
3) W.A.Mozart のオペラ作品③	内容と音楽の関連性
4) W.A.Mozart のオペラ作品④	鑑賞①
5) W.A.Mozart のオペラ作品⑤	鑑賞②

—ピアノ協奏曲を中心に—【高瀬】

6) Mozart のピアノ協奏曲	ピアノの知識と協奏曲の形式（D-dur K537）
7) Beethoven のピアノ協奏曲	楽器の発達と形式の工夫（4番 G-dur Op.58）
8) ロマン派の作品①	（Chopin 1 番 e-moll Op.11）（Schumann a-moll Op.54）
9) ロマン派の作品②	（Grieg a-moll Op.16）（Saint=Saens 4 番 c-moll Op.44）
10) ロマン派の作品③	（Tchaiko3 番）（Rachma 3 番 Op.43）

—現代作品—【塚本】

11) 現代邦人作品を聴く①	黛敏郎のCD解説の熟読と音楽鑑賞
12) 現代邦人作品を聴く②	武満徹のCD解説の熟読と音楽鑑賞
13) 現代邦人作品を聴く③	三善晃のCD解説の熟読と音楽鑑賞
14) 現代邦人作品を聴く④	北爪道夫のCD解説の熟読と音楽鑑賞
15) 現代邦人作品を聴く⑤	西村朗のCD解説の熟読と音楽鑑賞

Ⅴ　使用テキスト・教材等

担当教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		20		80	
自分の専攻以外の楽器を知り、その楽器の概略を説明できた。		○		○	
音楽の多様性を知り、様式の違いの理解を深めた。		○		○	
作曲家や作品の背景等を知り、その概略を説明できた。		○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で鑑賞した作品以外にも多くの作品を聴き、その作曲家や作品についての知識を持つこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

特になし

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
合唱Ａ		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題

様々な国の様々な時代の合唱曲を原語で歌い、言葉と音楽の共存を体感し、それぞれの様式の差異を認められるようになる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.声を合わせる感覚を身につける。
2.協力して演奏する姿勢を培う。
3.発声や発音、歌唱表現の基本的事項を習得し、実践する。

Ⅲ　授業の概要

様々な合唱曲を歌い、日本の伝統的な歌唱について理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	ガイダンス１	パート分け
2－3	日本語などによる合唱曲(I)	音取り練習
4－5	日本語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
6－7	ラテン語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
8－9	ラテン語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
10～11	ドイツ語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
12～13	ドイツ語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
14～15	前期曲のまとめ	楽曲練習
16～20	前期曲の発展的練習	楽曲を仕上げる
21	ガイダンス２	グループ分け
22～24	その他の言語による合唱曲(I)	音取り練習
25～27	その他の言語による合唱曲(II)	楽曲練習
28～29	後期のまとめ	楽曲練習
30	発表	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が指示する

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%			60	40	
音楽的表現力			○	○	
和声感			○	○	
舞台語発音			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

事前に音取りをし、読み方を予習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

私語厳禁。欠席、遅刻の扱いについては、初回の授業で明示する。
楽譜の製本をすること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
合唱B		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

Ⅰ　主題

様々な国の様々な時代の合唱曲を原語で歌い、言葉と音楽の共存を合唱Aに比べ更に深く体感し、それぞれの様式の差異の大切さを認められるようになる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.声を合わせる感覚を身につける。
2.上声部と下声部に意識をおき、協力して演奏する姿勢を培う。
3.発声や発音、歌唱表現の基本的事項を習得し、実践する。

Ⅲ　授業の概要

様々な合唱曲を歌い、日本の伝統的な歌唱について更に理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	ガイダンス１	パート分け
2－3	日本語などによる合唱曲(I)	音取り練習
4－5	日本語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
6－7	ラテン語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
8－9	ラテン語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
10－11	ドイツ語などによる合唱曲(I)	音取り、発音練習
12－13	ドイツ語などによる合唱曲(II)	楽曲練習
14－15	前期曲のまとめ	楽曲練習
16～20	前期曲の発展的練習	楽曲を仕上げる
21	ガイダンス２	グループ分け
22～24	その他の言語による合唱曲(I)	音取り練習
25～27	その他の言語による合唱曲(II)	楽曲練習
28～29	後期のまとめ	楽曲練習
30	発表	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が指示する

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%			60	40	
音楽的表現力			○	○	
和声感			○	○	
舞台語発音			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

事前に音取りをし、読み方を予習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

私語厳禁。欠席、遅刻の扱いについては、初回の授業で明示する。
楽譜の製本をすること。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
ソルフェージュＡ	〔1〕		音	1	井上幸子

高瀬健一郎、和佐祐子

Ⅰ　主題

この教科はソルフェージュ基礎能力習得と、より深く音楽を追究するため、また良き後進を育成すべき知識の体得のため、ヨーロッパ音楽における基礎的表現力を養い、かつ多種多様な音楽に親しみ、楽譜からの様々な情報を解読し自己の演奏においての「表現の助け」となるべきものを学ぶものである。さらに、学生個々のソルフェージュ能力の育成、保持、発展を目標とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.リズムや旋律を耳で聞き取り、書き取ることが出来る。
2.リズムや旋律を正確に読み取り、表現することが出来る。
3.正しい音程感を身につける。

Ⅲ　授業の概要

この授業は能力別クラスに分化させ、聴音能力（リズム、旋律）、新曲視奏（単声、二声のリズム打ち）、新曲視唱（旋律、または旋律＋リズム）などの能力を養う。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	グレード分け試験	聴音・新曲視唱・リズム打ち等による試験
2～6.	基礎力養成期間　Ⅰ	基礎編として、調性感を養いつつ、リズムの体得に重点を置き、様々なリズムを表現する。また、身近な歌唱教材を使用して、ト音記号の読譜を徹底的に行う。
7.	中間試験	聴音・新曲視唱・リズム打ち等による試験。結果により、グレードクラスを再編成。
8～12.	基礎力養成期間　Ⅱ	引き続き、基礎力を養うための様々なトレーニングを行う。
13～15.	まとめ	基礎力総まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

クラス単位で指示する

Ⅵ　参考書・参考資料

クラス単位で指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
聴音能力(リズム)	○			○	
聴音能力(旋律)	○			○	
新曲視奏(単声、二声のリズム打ち)	○			○	
新曲視唱(旋律、または旋律＋リズム)	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業内で与えられた課題や、授業内容の復習をしてくること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

五線紙を各自持参すること。学習の積み重ねを重視し、試験のみならず、受講状況を重要な評価資料とする。基礎力養成教科のため、単位認定は厳しく臨む。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
ソルフェージュB	〔1〕		音	1	井上幸子

高瀬健一郎、和佐祐子

I 主題

この教科はソルフェージュ基礎能力習得と、より深く音楽を追究するため、また良き後進を育成すべき知識の体得のため、ヨーロッパ音楽における基礎的表現力を養い、かつ多種多様な音楽に親しみ、楽譜からの様々な情報を解読し自己の演奏においての「表現の助け」となるべきものを学ぶものである。さらに、学生個々のソルフェージュ能力の育成、保持、発展を目標とする。

II 授業の到達目標

1.リズムや旋律を耳で聞き取り、書き取ることが出来る。
2.リズムや旋律を正確に読み取り、表現することが出来る。
3.正しい音程感を身につける。

III 授業の概要

この授業は能力別クラスに分化させ、聴音能力（リズム、旋律）、新曲視奏（単声、二声のリズム打ち）、新曲視唱（旋律、または旋律＋リズム）などの能力を養う。

IV 授業計画と内容

	項目	内容
1～6.	基礎力養成期間 III	基礎編として、引き続き調性感を養いつつ、リズムの体得に重点を置き、様々なリズムを表現する。また、身近な歌唱教材を使用して、ト音記号の読譜を徹底的に行う。
7.	中間試験	聴音・新曲視唱・リズム打ち等による試験。結果により、グレードクラスを再編成。
8～12.	基礎力養成期間 IV	引き続き、基礎力を養うための様々なトレーニングを行う。
13～15.	まとめ	基礎力総まとめ

V 使用テキスト・教材等

クラス単位で指示する

VI 参考書・参考資料

クラス単位で指示する

VII 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
聴音能力(リズム)	○			○	
聴音能力(旋律)	○			○	
新曲視奏(単声、二声のリズム打ち)	○			○	
新曲視唱(旋律、または旋律＋リズム)	○			○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

授業内で与えられた課題や、授業内容の復習をしてくること。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

五線紙を各自持参すること。学習の積み重ねを重視し、試験のみならず、受講状況を重要な評価資料とする。基礎力養成教科のため、単位認定は厳しく臨む。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
ソルフェージュC		〔1〕	音	2	井上幸子

高瀬健一郎、和佐祐子

Ⅰ　主題

この教科はソルフェージュ基礎能力習得と、より深く音楽を追究するため、また良き後進を育成すべき知識の体得のため、ヨーロッパ音楽における基礎的表現力を養い、かつ多種多様な音楽に親しみ、楽譜からの様々な情報を解読し自己の演奏においての「表現の助け」となるべきものを学ぶものである。さらに、学生個々のソルフェージュ能力の育成、保持、発展を目標とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.リズムや旋律を耳で聞き取り、書き取ることが出来る。
2.リズムや旋律を正確に読み取り、表現することが出来る。
3.正しい音程感を身につける。

Ⅲ　授業の概要

この授業は能力別クラスに分化させ、聴音能力（リズム、旋律）、新曲視奏（単声、二声のリズム打ち）、新曲視唱（旋律、または旋律＋リズム）などの能力を養う。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	グレード分け試験	聴音・新曲視唱・リズム打ち等による試験
2～6.	応用力養成期間　Ⅰ	応用編として、調性感を養いつつ、リズムの体得に重点を置き、様々なリズムを表現する。また、身近な歌唱教材を使用して、ト音記号の読譜を徹底的に行う。
7.	中間試験	聴音・新曲視唱・リズム打ち等による試験。結果により、グレードクラスを再編成。
8～12.	応用力養成期間　Ⅱ	引き続き、応用力を養うための様々なトレーニングを行う。
13～15.	まとめ	応用力総まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

クラス単位で指示する

Ⅵ　参考書・参考資料

クラス単位で指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
聴音能力(リズム)	○			○	
聴音能力(旋律)	○			○	
新曲視奏(単声、二声のリズム打ち)	○			○	
新曲視唱(旋律、または旋律＋リズム)	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

授業内で与えられた課題や、授業内容の復習をしてくること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

五線紙を各自持参すること。学習の積み重ねを重視し、試験のみならず、受講状況を重要な評価資料とする。基礎力養成教科のため、単位認定は厳しく臨む。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
ソルフェージュD		〔1〕	音	2	井上幸子

高瀬健一郎、和佐祐子

Ⅰ 主題

この教科はソルフェージュ基礎能力習得と、より深く音楽を追究するため、また良き後進を育成すべき知識の体得のため、ヨーロッパ音楽における基礎的表現力を養い、かつ多種多様な音楽に親しみ、楽譜からの様々な情報を解読し自己の演奏においての「表現の助け」となるべきものを学ぶものである。さらに、学生個々のソルフェージュ能力の育成、保持、発展を目標とする。

Ⅱ 授業の到達目標

1.リズムや旋律を耳で聞き取り、書き取ることが出来る。
2.リズムや旋律を正確に読み取り、表現することが出来る。
3.正しい音程感を身につける。

Ⅲ 授業の概要

この授業は能力別クラスに分化させ、聴音能力（リズム、旋律）、新曲視奏（単声、二声のリズム打ち）、新曲視唱（旋律、または旋律＋リズム）などの能力を養う。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1～6.応用力養成期間 Ⅲ	応用編として、引き続き調性感を養いつつ、リズムの体得に重点を置き、様々なリズムを表現する。また、身近な歌唱教材を使用して、ト音記号の読譜を徹底的に行う。
7.中間試験	聴音・新曲視唱・リズム打ち等による試験。結果により、グレードクラスを再編成。
8～12.応用力養成期間 Ⅳ	引き続き、応用力を養うための様々なトレーニングを行う。
13～15.まとめ	応用力総まとめ

Ⅴ 使用テキスト・教材等

クラス単位で指示する

Ⅵ 参考書・参考資料

クラス単位で指示する

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法／学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100	50			50	
聴音能力（リズム）	○			○	
聴音能力（旋律）	○			○	
新曲視奏（単声、二声のリズム打ち）	○			○	
新曲視唱（旋律、または旋律＋リズム）	○			○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

授業内で与えられた課題や、授業内容の復習をしてくること。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

五線紙を各自持参すること。学習の積み重ねを重視し、試験のみならず、受講状況を重要な評価資料とする。基礎力養成教科のため、単位認定は厳しく臨む。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
グレード準備講座Ａ		〔1〕	**音**	**1**	**大迫智代、新納紀子**

Ⅰ　主題
この授業では指導者として必要な知識を身につける

Ⅱ　授業の到達目標
1.和音記号、コードネームを学び曲の構成を理解できるようになる
2.基礎を学び専門家として必要な知識を身につける
3.ヤマハ指導グレード5級　カワイピアノ演奏グレード6級取得を目指す

Ⅲ　授業の概要
音楽の基礎知識、基礎能力を身につける

Ⅳ　授業計画と内容
この授業は和音記号、コードネームを把握し、楽曲全体を理解し、指導に生かせるようにする

	項　目	内　容
1.	ガイダンス	グレード内容の確認
〈ヤマハ〉		
2〜10.	聴音	エレクトーンによるメロディー. バス. 和音記号の聴音
	伴奏付け	単旋律にピアノで伴奏を付ける
	移調奏	ピアノ譜を定められた音程に移調演奏する
	コード進行法A	旋律にコードと低音を記入する
	コード進行法B	コード付き旋律にカウンターラインを記入する
	メロディー視唱	無伴奏の旋律を初見視唱する
11〜13.	ひきうたい	コード付き旋律をピアノ伴奏しながら初見視唱する
〈カワイ〉		
2.	和音記号. 和音進行	和音の機能を知り、進行法を学ぶ
3〜13.	コードネーム	コードの種類と構成音を把握し、コードを連結演奏
	コード譜	
	ベース付け	メロディーに和音記号ベースを付ける
	課題曲演奏	バッハ・インヴェンションの解説と演奏
14〜15.	まとめ	グレード内容の確認および演習

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導グレード 5・4・3 級筆記試験問題一覧 2006〜2012 年実施　ヤマハ　9784864614849
指導グレード 5・4・3 級実技試験問題一覧 2006〜2012 年実施　ヤマハ　9784864614832
キーボードトレーニング集A　カワイ出版　9784760974771

Ⅵ　参考書・参考資料
ヤマハ音楽能力検定　要項
2017 カワイグレードテストのご案内

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他
配点比率(%)　合計 100%	75	10		15	
和音記号、コードネームの理解	○	○		○	
専門家としての知識の定着	○	○		○	
課題演奏	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
テキストの事前予習、講義内容の復習が望ましい

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
＜ヤマハ＞グレード取得者はシステム講師採用試験時、科目免除になる
＜カワイ＞グレード取得者は講師採用試験時、実技免除となる

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
グレード準備講座Ｂ		〔1〕	**音**	**1**	**大迫智代、新納紀子**

Ⅰ　主題
この授業では指導者として必要な知識を身につける

Ⅱ　授業の到達目標
1.和音記号、コードネームを学び曲の構成を理解できるようになる
2.基礎を学び専門家として必要な知識を身につける
3.ヤマハ指導グレード5級　カワイピアノ演奏グレード6級取得を目指す

Ⅲ　授業の概要
音楽の基礎知識、基礎能力を身につける

Ⅳ　授業計画と内容
この授業は和音記号、コードネームを把握し、楽曲全体を理解し、指導に生かせるようにする

	項　目	内　容
1.	ガイダンス	グレード内容の確認
〈ヤマハ〉		
2～10.	聴音	エレクトーンによるメロディー. バス. 和音記号の聴音
	伴奏付け	単旋律にピアノで伴奏を付ける
	移調奏	ピアノ譜を定められた音程に移調演奏する
	コード進行法A	旋律にコードと低音を記入する
	コード進行法B	コード付き旋律にカウンターラインを記入する
	メロディー視唱	無伴奏の旋律を初見視唱する
11～13.	ひきうたい	コード付き旋律をピアノ伴奏しながら初見視唱する
〈カワイ〉		
2.	和音記号. 和音進行	和音の機能を知り、進行法を学ぶ
3～13.	コードネーム	コードの種類と構成音を把握し、コードを連結演奏
	コード譜	
	ベース付け	メロディーに和音記号ベースを付ける
	課題曲演奏	バッハ・インヴェンションの解説と演奏
14～15.	まとめ	グレード内容の確認および演習

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導グレード 5・4・3 級＜筆記試験＞問題一覧 2006～2012 年実施　ヤマハ　9784864614849
指導グレード 5・4・3 級＜実技試験＞問題一覧 2006～2012 年実施　ヤマハ　9784864614832
キーボードトレーニング集A　カワイ出版　9784760974771

Ⅵ　参考書・参考資料
ヤマハ音楽能力検定　要項
2017 カワイグレードテストのご案内

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他
配点比率(%)　合計 100%	75	10		15	
和音記号、コードネームの理解	○	○		○	
専門家としての知識の定着	○	○		○	
課題演奏	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
テキストの事前予習、講義内容の復習が望ましい

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
＜ヤマハ＞グレード取得者はシステム講師採用試験時、科目免除になる
＜カワイ＞グレード取得者は講師採用試験時、実技免除となる

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
グレード準備講座Ｃ		〔1〕	**音**	**2**	**大迫智代、新納紀子**

Ⅰ　主題

この授業では指導者として必要な知識を身につける

Ⅱ　授業の到達目標

1.和音記号、コードネームを学び曲の構成を理解できるようになる
2.基礎を学び専門家として必要な知識を身につける
3.ヤマハ指導グレード5級　カワイピアノ演奏グレード6級取得を目指す

Ⅲ　授業の概要

音楽の基礎知識、基礎能力を身につける

Ⅳ　授業計画と内容

この授業は和音記号、コードネームを把握し、楽曲全体を理解し、指導に生かせるようにする

	項　目	内　容
1.	ガイダンス	グレード内容の確認
〈ヤマハ〉		
2～10.	聴音	エレクトーンによるメロディー. バス. 和音記号の聴音
	伴奏付け	単旋律にピアノで伴奏を付ける
	移調奏	ピアノ譜を定められた音程に移調演奏する
	コード進行法A	旋律にコードと低音を記入する
	コード進行法B	コード付き旋律にカウンターラインを記入する
	メロディー視唱	無伴奏の旋律を初見視唱する
11～13.	ひきうたい	コード付き旋律をピアノ伴奏しながら初見視唱する
〈カワイ〉		
2.	和音記号. 和音進行	和音の機能を知り、進行法を学ぶ
3～13.	コードネーム	コードの種類と構成音を把握し、コードを連結演奏
	コード譜	
	ベース付け	メロディーに和音記号ベースを付ける
	課題曲演奏	バッハ・インヴェンションの解説と演奏
14～15.	まとめ	グレード内容の確認および演習

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導グレード 5・4・3 級筆記試験問題一覧 2006～2012 年実施	ヤマハ	9784864614849
指導グレード 5・4・3 級実技試験問題一覧 2006～2012 年実施	ヤマハ	9784864614832
キーボードトレーニング集A	カワイ出版	9784760974771

Ⅵ　参考書・参考資料

ヤマハ音楽能力検定　要項
2017 カワイグレードテストのご案内

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他
配点比率(%)　合計 100%	75	10		15	
和音記号、コードネームの理解	○	○		○	
専門家としての知識の定着	○	○		○	
課題演奏	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストの事前予習、講義内容の復習が望ましい

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

＜ヤマハ＞グレード取得者はシステム講師採用試験時、科目免除になる
＜カワイ＞グレード取得者は講師採用試験時、実技免除となる

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
グレード準備講座Ｄ		〔1〕	**音**	**2**	**大迫智代、新納紀子**

Ⅰ　主題
この授業では指導者として必要な知識を身につける

Ⅱ　授業の到達目標
1.和音記号、コードネームを学び曲の構成を理解できるようになる
2.基礎を学び専門家として必要な知識を身につける
3.ヤマハ指導グレード5級　カワイピアノ演奏グレード6級取得を目指す

Ⅲ　授業の概要
音楽の基礎知識、基礎能力を身につける

Ⅳ　授業計画と内容
この授業は和音記号、コードネームを把握し、楽曲全体を理解し、指導に生かせるようにする

	項　目	内　容
1.	ガイダンス	グレード内容の確認
〈ヤマハ〉		
2～10.	聴音	エレクトーンによるメロディー. バス. 和音記号の聴音
	伴奏付け	単旋律にピアノで伴奏を付ける
	移調奏	ピアノ譜を定められた音程に移調演奏する
	コード進行法A	旋律にコードと低音を記入する
	コード進行法B	コード付き旋律にカウンターラインを記入する
	メロディー視唱	無伴奏の旋律を初見視唱する
11～13.	ひきうたい	コード付き旋律をピアノ伴奏しながら初見視唱する
〈カワイ〉		
2.	和音記号. 和音進行	和音の機能を知り、進行法を学ぶ
3～13.	コードネーム	コードの種類と構成音を把握し、コードを連結演奏
	コード譜	
	ベース付け	メロディーに和音記号ベースを付ける
	課題曲演奏	バッハ・インヴェンションの解説と演奏
14～15.	まとめ	グレード内容の確認および演習

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導グレード 5・4・3 級筆記試験問題一覧 2006～2012 年実施　ヤマハ　9784864614849
指導グレード 5・4・3 級実技試験問題一覧 2006～2012 年実施　ヤマハ　9784864614832
キーボードトレーニング集A　カワイ出版　9784760974771

Ⅵ　参考書・参考資料
ヤマハ音楽能力検定　要項
2017 カワイグレードテストのご案内

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他
配点比率(%)　合計 100%	75	10		15	
和音記号、コードネームの理解	○	○		○	
専門家としての知識の定着	○	○		○	
課題演奏	○	○		○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
テキストの事前予習、講義内容の復習が望ましい

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
＜ヤマハ＞グレード取得者はシステム講師採用試験時、科目免除になる
＜カワイ＞グレード取得者は講師採用試験時、実技免除となる

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
ミュージック・コンピュータ活用法		**2**	**音**	**1**	**仲戸川智隆**

Ⅰ　主題
コンピュータを用いた楽譜作成を通じて、音楽理論と記譜法を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標
1.コンピュータの楽譜作成における活用法に習熟する。
2.音楽理論の理解を一層深める。
3.記譜法の理解を一層深める。

Ⅲ　授業の概要
コンピュータソフトを用いて人数を制限して行う。

Ⅳ　授業計画と内容
1. コンピュータソフトの基本操作について
2. ソフトを用いた記譜法について、音楽理論との関係性の理解-1(導入)
3. ソフトを用いた記譜法について、音楽理論との関係性の理解-2(導入から応用)
4. ソフトを用いた記譜法について、音楽理論との関係性の理解-3(応用)
5. 五線と小節、繰り返しの設定について、様々なファイル形式での出力方法・印刷方法について
6. 実際の楽譜を使用しての演習-1
7. 音符と休符について、ならびに移調楽器の楽譜の入力について
8. 実際の楽譜を使用しての演習-2
9. 音楽記号・発想記号の入力について
10. 実際の楽譜を使用しての演習-3
11. 楽譜上における文字の入力について
12. 実際の楽譜を使用しての演習-4
13. レイアウトの整え方について、スコアからパート譜の作成方法について
14. 実際の楽譜を使用しての演習-5
15. まとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等
適宜授業内で用いる。

Ⅵ　参考書・参考資料
Finale2014 実用全ガイド　スタイルノート楽譜制作部　スタイルノート　2014 年
他　授業内で提示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	50			50	
音楽理論に対する理解度	○			○	
記譜法に対する理解度	○			○	
コンピュータソフトに対する習熟度	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
授業時間外で、ソフトを用いての学習を強く望む学生は、各自で購入し学ぶことを望む。
音楽理論の学習、記譜法の学習が必要なので、前期に学んだ「音楽理論 A」を復習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
過度な私語など、授業に対して著しい進行の妨げを行った者に対しては、退出を命じる場合もある(その場合は欠席の扱いとする)。
Finale PrintMusic(楽譜作成ソフト)を所有している学生のみが履修できる科目である。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
アンサンブル演習Ａ（声楽）		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

薩川美和子

Ⅰ　主題
アンサンブルの実践を通して、独唱にはない多彩な音楽的表現を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.適切なハーモニーで歌うことができる。
2.オペラのそれぞれの役の大切さ、協力して作品を作り上げる喜びを体得する。
3.歌唱や演技に必要な表現力を身につける。

Ⅲ　授業の概要
合唱とオペラによるアンサンブルを演奏する。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	ガイダンス	
2－10	オペラ・合唱音楽稽古(I)	オペラ・合唱の基礎的な音楽稽古
11－15	オペラ・合唱音楽稽古(II)	オペラ・合唱の発展的な音楽稽古
16－20	合唱練習、オペラ立ち稽古	合唱の発展的練習、オペラの演技付き稽古
21－28	オペラ立ち稽古	オペラの演技つきの練習
29	オペラ通し稽古	メーク、衣装付きの通し稽古
30	オペラ公演	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100		10	50	40	
楽曲に対する理解		○	○	○	
基本的な表現力			○	○	
舞台でのマナーの習得			○	○	
コミュニケーション能力			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音取りや言葉の読み、意味調べは、事前に各自が行うこと。
立ち稽古は暗譜すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
アンサンブルは大人数での演習です。欠席は、基本的に認めません。
立ち稽古の服装を考えること。場にそぐわない場合は、退室を命じます。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
アンサンブル演習Ａ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**1**	**小林秀子**

石川晴恵

Ⅰ　主題

今まで積み上げてきたピアノソロ演奏技術を礎に、ピアノ連弾曲に取り組む。

Ⅱ　授業の到達目標

1.個々の音楽を融合させて作り上げていくアンサンブルの基礎を習得する。
2.ピアノソロと同様に音楽全般の視野を拡げる.
3.ピアノアンサンブルの演奏様式への理解を深める。

Ⅲ　授業の概要

ペアを組み、各担当教員の下で連弾曲を選曲し、グループレッスンを行う。前期は自由に選曲し、調和の楽しさを学ぶ.後期はブラームス,シューベルトの舞曲を中心に,学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

	項目	内　容
前期 1.	面談	ペアを組み選曲する。
2～4.	演奏表現(1)	作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
5～7.	演奏表現(2)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
8～10.	演奏表現(3)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
11～15.	演奏表現(4)	今まで学んだ作品から試験曲を決め、解説を含めた仕上げをする。
後期 1.	面談	ペアを組み選曲する。
2～4.	演奏表現(5)	作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
5～7.	演奏表現(6)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
8～10.	演奏表現(7)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
11～15.	演奏表現(8)	今まで学んだ作品から試験曲を決め、解説を含めた仕上げをする。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

コースや専攻学生の進度にあわせて楽曲を適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	実技試験.論文.トーク	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80			20	
アンサンブルに対する意欲、理解度	○			○	
演奏様式に対する研究	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

グループレッスンにより他のペアの演奏曲目も同時に学ぶ。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
アンサンブル演習Ａ（管弦打）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆、野津如弘、竹内英美子

Ⅰ　主題
管弦打楽器に必要不可欠なアンサンブル能力の涵養を図る。

Ⅱ　授業の到達目標
1.柔軟なアンサンブル能力を高める。
2.アンサンブルに必要な個人能力を高める。
3.アンサンブルを通じて、同級生、上級生とのコミュニケーション能力を養う。

Ⅲ　授業の概要
A.ウインドオーケストラ B.フルートを中心とした室内楽 C.弦楽器を中心とした室内楽
（上記 A.B.C.間において、学生は適宜移動して授業を受講する）

Ⅳ　授業計画と内容

項目		内容
1.	授業説明	年間予定、成績評価方法についての説明、教材としての楽譜準備
2～4.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 A.B
4～6.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 C.D
7～9.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 E.F
10～11.	合奏	楽曲練習 A.B.C
12～13.	合奏	楽曲練習 D.E.F
14～15.	合奏	前期授業における総まとめを行う。
16～19.	合奏	楽曲練習 G.H
20～22.	合奏	楽曲練習 I.J
23～26.	合奏	楽曲練習 K.L
27～28.	合奏	楽曲練習 G.H.I.J
29～30.	合奏	楽曲練習 K.L.　総まとめを行い、定期演奏会を実施する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲を教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
演奏会で行う楽曲は、教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
合奏への理解と技術				○	
合奏におけるコミュニケーション				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
演奏会を欠席の場合には基本的に単位を与えない。授業計画はあくまで目安である。急遽演奏会等が入ることにより、授業運営・日程・時間に変更が生じることがある。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
アンサンブル演習Ｂ（声楽）		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

薩川美和子

Ⅰ　主題
アンサンブルの実践を通して、独唱にはない多彩な音楽的表現を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.適切なハーモニで歌うことができる。
2.オペラのそれぞれの役の大切さ、協力して作品を作り上げる喜びを体得する。
3.歌唱や演技に必要な表現力を身につける。

Ⅲ　授業の概要
合唱とオペラによるアンサンブルを演奏する。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目		内　容
1	ガイダンス	
2－10	オペラ・合唱音楽稽古(I)	オペラ・合唱の基礎的な音楽稽古
11－15	オペラ・合唱音楽稽古(II)	オペラ・合唱の発展的な音楽稽古
16－20	合唱練習、オペラ立ち稽古	合唱の発展的練習、オペラの演技付き稽古
21－28	オペラ立ち稽古	オペラの演技つきの練習
29	オペラ通し稽古	メーク、衣装付きの通し稽古
30	オペラ公演	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
指導教員が指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		10	50	40	
楽曲に対する理解		○	○	○	
基本的な表現力			○	○	
舞台でのマナーの習得			○	○	
コミュニケーション能力			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音取りや言葉の読み、意味調べは、事前に各自が行うこと。
立ち稽古は暗譜すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
アンサンブルは大人数での演習です。欠席は、基本的に認めません。
立ち稽古の服装を考えること。場にそぐわない場合は、退室を命じます。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
アンサンブル演習Ｂ（ピアノ）		〔2〕	音	2	小林秀子

石川晴恵

Ⅰ　主題
今まで積み上げてきたピアノソロ演奏技術を礎に、ピアノ連弾曲に取り組む。

Ⅱ　授業の到達目標
1.個々の音楽を融合させて作り上げていくアンサンブルの基礎を学ぶ。
2.ピアノソロと同様に音楽全般の視野を拡げる.
3.ピアノアンサンブルの演奏様式の理解を深める。

Ⅲ　授業の概要
ペアを組み、各担当教員の下で連弾曲を選曲し、グループレッスンを行う。前期はフランスの作曲家の作品、後期は古典派、ロマン派、近現代の作品を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
前期1.　面談	ペアを組み選曲する。
2～4.　演奏表現(1)	作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
5～7.　演奏表現(2)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
8～10.　演奏表現(3)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
11～14.演奏表現(4)	今まで学んだ作品から試験曲を決め、解説を含めた仕上げをする。
後期1.　面談	ペアを組み選曲する。
2～4.　演奏表現(5)	作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
5～7.　演奏表現(6)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
8～10.　演奏表現(7)	新しく選曲し、作曲者の人間性や作品の内容、時代背景をディスカッションし、演奏技術の向上を図る。
11～15.演奏表現(8)	今まで学んだ作品から試験曲を決め、解説を含めた仕上げをする。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
コースや専攻学生の進度にあわせて楽曲を適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法／学習項目	実技試験.論文.トーク	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　)
配点比率(%)　合計 100	80			20	
アンサンブルに対する意欲、理解度	○			○	
演奏様式に対する研究	○			○	
授業に対する準備、姿勢	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
グループレッスンにより他のペアの演奏曲目も同時に学ぶ。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
アンサンブル演習Ｂ（管弦打）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、野津如弘、竹内英美子

Ⅰ　主題

管弦打楽器に必要不可欠なアンサンブル能力の涵養を図る。

Ⅱ　授業の到達目標

1.柔軟なアンサンブル能力を高める。
2.アンサンブルに必要な個人能力を高める。
3.アンサンブルを通じて、同級生、上級生、下級生とのコミュニケーション能力を養う。

Ⅲ　授業の概要

A.ウインドオーケストラ B.フルートを中心とした室内楽 C.弦楽器を中心とした室内楽
（上記 A.B.C.間において、学生は適宜移動して授業を受講する）

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.　授業説明	年間予定、成績評価方法についての説明、教材としての楽譜準備
2～ 4.　合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 A.B
4～ 6.　合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 C.D
7～ 9.　合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 E.F
10～11.　合奏	楽曲練習 A.B.C
12～13.　合奏	楽曲練習 D.E.F
14～15.　合奏	前期授業における総まとめを行う。
16～19.　合奏	楽曲練習 G.H
20～22.　合奏	楽曲練習 I.J
23～26.　合奏	楽曲練習 K.L
27～28.　合奏	楽曲練習 G.H.I.J
29～30.　合奏	楽曲練習 K.L.　総まとめを行い、定期演奏会を実施する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲を教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

演奏会で行う楽曲は、教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
合奏への理解と技術				○	
合奏におけるコミュニケーション				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

演奏会を欠席の場合には基本的に単位を与えない。授業計画はあくまで目安である。急遽演奏会等が入ることにより、授業運営・日程・時間に変更が生じることがある。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
室内楽演習Ａ		〔1〕	**音**	**1**	**高瀬健一郎**

Ⅰ　主題

室内楽は器楽奏者として重要な演奏分野のひとつである。各担当教員がそれぞれの立場からレッスンを行うことにより、音楽作品の全体像とそれを構成するパートの要素の両面からの学習を行い、学内演奏会等に出演した際に、充実した内容の演奏を可能にする事を目標としている。

Ⅱ　授業の到達目標

1.アンサンブルに必要な能力を高める
2.パートの働きを考えながら音楽作品の全体像とつかむ。
3.バランスや速度、強弱、音色等を考え、自分たちなりの表現をもって演奏できる。

Ⅲ　授業の概要

声楽、ピアノ、管弦打楽器を様々な形で組み合わせ、アンサンブルを実技レッスン形式で行う。原則として、二種類以上の異なる楽器による二重奏以上の編成の基本的な室内楽曲を取り上げる。 学生は自らグループを編成し、音楽科専任教員に指導を依頼、日程を調整した上で指導を受ける。メンバー間の練習計画・日程の組み立て、またリハーサルに臨むまでの各人の準備といったプロセスも重要な指導要素として取り扱う。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	ガイダンス	学内演奏行事等を目標に、履修者はグループと曲を決める。
2～6.	楽曲の譜読み	分析を中心に楽曲をグループごとに研究する。
7～14.	アンサンブル演習	練習の仕方を話し合いながら、曲創りをする。
15.	まとめ	

各受講者（グループ）は上記スケジュールをもとに学習計画を立て、各担当教員によるレッスンを受講。成果発表として学内外の演奏会等に出演することが望ましい。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各楽曲の楽譜

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
総譜をもとにした楽曲研究				○	
互いを尊重した演奏法の習得				○	
練習、リハーサルの日程計画力				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

指導を受ける際の準備の状態、演奏、受講態度等の学習態度を総合的に評価するので、レッスン前に、個人かつグループで譜読みをし、練習を積んだ上でレッスンに臨むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

指導担当者が指導の際に評価し、その平均点を算出したものが評価となる。
伴奏演習用レッスンノートを通し、受講状況を管理する。45 分の実技指導を1ポイントとし、21 ポイントで単位を認定する。規定のポイントに達しなかった場合は「受講辞退」とする。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
室内楽演習Ｂ		〔1〕	**音**	**2**	**高瀬健一郎**

Ⅰ　主題

室内楽は器楽奏者として重要な演奏分野のひとつである。各担当教員がそれぞれの立場からレッスンを行うことにより、音楽作品の全体像とそれを構成するパートの要素の両面からの学習を行い、学内演奏会等に出演した際に、充実した内容の演奏を可能にする事を目標としている。

Ⅱ　授業の到達目標

1.アンサンブルに必要な能力を高める
2.パートの働きを考えながら音楽作品の全体像とつかむ。
3.バランスや速度、強弱、音色等を考え、自分たちなりの表現をもって演奏できる。

Ⅲ　授業の概要

声楽、ピアノ、管弦打楽器を様々な形で組み合わせ、アンサンブルを実技レッスン形式で行う。原則として、二種類以上の異なる楽器による二重奏以上の編成の基本的な室内楽曲を取り上げる。 学生は自らグループを編成し、音楽科専任教員に指導を依頼、日程を調整した上で指導を受ける。メンバー間の練習計画・日程の組み立て、またリハーサルに臨むまでの各人の準備といったプロセスも重要な指導要素として取り扱う。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	ガイダンス	学内演奏行事等を目標に、履修者はグループと曲を決める。
2～6.	楽曲の譜読み	分析を中心に楽曲をグループごとに研究する。
7～14.	アンサンブル演習	練習の仕方を話し合いながら、曲創りをする。
15.	まとめ	

各受講者（グループ）は上記スケジュールをもとに学習計画を立て、各担当教員によるレッスンを受講。成果発表として学内外の演奏会等に出演することが望ましい。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各楽曲の楽譜

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
総譜をもとにした楽曲研究				○	
互いを尊重した演奏法の習得				○	
練習、リハーサルの日程計画力				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

指導を受ける際の準備の状態、演奏、受講態度等の学習態度を総合的に評価するので、レッスン前に、個人かつグループで譜読みをし、練習を積んだ上でレッスンに臨むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

指導担当者が指導の際に評価し、その平均点を算出したものが評価となる。
伴奏演習用レッスンノートを通し、受講状況を管理する。45 分の実技指導を1ポイントとし、
21 ポイントで単位を認定する。規定のポイントに達しなかった場合は「受講辞退」とする。
年度始めに配布する「伴奏演習　レッスンノート」は、紛失しても再発行しないので、充分注意して管理すること。学期末にレッスンノートが提出されない場合は単位認定しない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
伴奏演習Ａ		〔1〕	**音**	**1**	**高瀬健一郎**

Ⅰ　主題

声楽や器楽のピアノ伴奏を通して、各パートの役割や相手の楽器に対応した演奏表現を学ぶ。
声楽や他の楽器の演奏上の特性を知ってアンサンブルに活かすとともに、協奏曲の伴奏では、
本来の楽器の音色感や音の重ね方などからピアノでの表現方法を工夫する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.相手の楽器の特性を知り、演奏しやすいように適切に合わせ、バランスを作ることができる。
2.各パートに求められる音楽上の役割を理解し、アンサンブルすることができる。
3.相手の楽器に対して、また、オリジナル曲の楽器に対応して、音色の工夫ができる。

Ⅲ　授業の概要

ピアノを主専攻とする学生が受講できる。声楽や管打楽器を主専攻とする学生を自ら探して組み、それぞれ個人練習と合わせの練習を重ねる。「声楽　A・B・C・D」や「器楽（管打楽器）同」をピアノ伴奏者として受講し、相手の楽器等の特性を理解し、合わせのテクニックや音楽的な解釈の指導を受ける。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1)～2)	楽器等の理解	実技レッスンを通して、楽器の特性を理解し、合わせ方（必要な間の取り方等）や音量バランスを考える。
3)～5)	解釈と表現	解釈や演奏表現の指導を受け、演奏に磨きをかけていく。

概ねこの5回の指導を1クールとし、これを繰り返す。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

実技担当教員が適宜決定・指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	0	0	0	100	0
合わせとバランス作り				○	
各パートの役割の理解				○	
演奏表現上の音色の工夫				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

作曲家の概略と取り上げる作品の作曲時期、形式や様式、特に声楽曲の場合は歌詞の内容や歌劇全体のあらすじ等を事前に研究し、自分なりの解釈と演奏表現の欲求を持って、実技指導に臨む。
実技指導後は、受けた指導を振り返り、改めて演奏表現を考え、演奏を修正して、次回に臨む。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

指導担当者が指導の際に評価し、その平均点を算出したものが評価となる。
伴奏演習用レッスンノートを通し、受講状況を管理する。45 分の実技指導を1ポイントとし、
21 ポイントで単位を認定する。規定のポイントに達しなかった場合は「受講辞退」とする。
年度始めに配布する「伴奏演習　レッスンノート」は、紛失しても再発行しないので、充分注意して管理すること。学期末にレッスンノートが提出されない場合は単位認定しない。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
伴奏演習Ｂ		〔1〕	**音**	**2**	**高瀬健一郎**

Ⅰ　主題

声楽や器楽のピアノ伴奏を通して、各パートの役割や相手の楽器に対応した演奏表現を学ぶ。
声楽や他の楽器の演奏上の特性を知ってアンサンブルに活かすとともに、協奏曲の伴奏では、
本来の楽器の音色感や音の重ね方などからピアノでの表現方法を工夫する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.相手の楽器の特性を知り、演奏しやすいように適切に合わせ、バランスを作ることができる。
2.各パートに求められる音楽上の役割を理解し、アンサンブルすることができる。
3.相手の楽器に対して、また、オリジナル曲の楽器に対応して、音色の工夫ができる。

Ⅲ　授業の概要

ピアノを主専攻とする学生が受講できる。声楽や管打楽器を主専攻とする学生を自ら探して組み、それぞれ個人練習と合わせの練習を重ねる。「声楽　A・B・C・D」や「器楽（管打楽器）同」をピアノ伴奏者として受講し、相手の楽器等の特性を理解し、合わせのテクニックや音楽的な解釈の指導を受ける。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1)～2)	楽器等の理解	実技レッスンを通して、楽器の特性を理解し、合わせ方（必要な間の取り方等）や音量バランスを考える。
3)～5)	解釈と表現	解釈や演奏表現の指導を受け、演奏に磨きをかけていく。

概ねこの5回の指導を1クールとし、これを繰り返す。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

実技担当教員が適宜決定・指示する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	0	0	0	100	0
合わせとバランス作り				○	
各パートの役割の理解				○	
演奏表現上の音色の工夫				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

作曲家の概略と取り上げる作品の作曲時期、形式や様式、特に声楽曲の場合は歌詞の内容や歌劇全体のあらすじ等を事前に研究し、自分なりの解釈と演奏表現の欲求を持って、実技指導に臨む。
実技指導後は、受けた指導を振り返り、改めて演奏表現を考え、演奏を修正して、次回に臨む。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

指導担当者が指導の際に評価し、その平均点を算出したものが評価となる。
伴奏演習用レッスンノートを通し、受講状況を管理する。45 分の実技指導を1ポイントとし、
21 ポイントで単位を認定する。規定のポイントに達しなかった場合は「受講辞退」とする。
年度始めに配布する「伴奏演習　レッスンノート」は、紛失しても再発行しないので、充分注意して管理すること。学期末にレッスンノートが提出されない場合は単位認定しない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽実践Ａ（声楽）		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

薩川美和子

Ⅰ　主題
曲の内容を理解し、時代背景や様々な要素を考慮して歌う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.言葉の意味と音楽を結び付けて歌うことができる。
2.歌唱・演技に必要な基本的な表現力を身につける。
3.舞台マナーを習得する。

Ⅲ　授業の概要
演習形式により、歌曲、オペラ、ミュージカルについての知識を深め、演奏表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目		内容
1	ガイダンス１	選曲
2	オペラ・ミュージカルの鑑賞	舞台マナー、表現法など研究する
3－7	音楽稽古	楽曲の練習
8－14	立ち稽古	演技付きで実践的に稽古する
15	発表（第１回）	
16	ガイダンス２	選曲
17－19	諸外国語の発音	発音記号を学ぶ
20－21	朗読	詩を原語で朗読する
22－25	楽曲練習	発音、歌唱法を研究する
26－29	楽曲仕上げ	音楽的表現を追求する
30	発表（第２回）	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
イタリア歌曲集　など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		10	50	40	
楽曲に対する理解		○	○	○	
基本的な表現力			○	○	
舞台でのマナーの習得			○	○	
コミュニケーション能力			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音取りや言葉の発音、意味調べは、各自事前に行うこと。
立ち稽古は暗譜すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
アンサンブルは大人数での演習です。欠席は、基本的に認めません。
また、立ち稽古の服装を考えること。場にそぐわない場合は、退室を命じます。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽実践Ａ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**1**	**高瀬健一郎**

Ⅰ　主題

楽譜から様々なことを読みとり、どんな風に表現したいのかを考える「作品解釈」のために必要な基礎知識を、各時代の様式や演奏習慣、社会情勢を含めて得ることが主題である。

Ⅱ　授業の到達目標

1.音楽史にとって主要な都市を始めとするヨーロッパの地理を学び、把握する
2.主な作曲家の生涯を学び、概略を説明できる
3.主な作曲家の主なピアノ作品の整理し、概略を説明できることを到達目標とする

Ⅲ　授業の概要

作曲家毎にその生涯とピアノ作品についての知識や、各時代の様式等の理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1)	ガイダンス	授業の説明、テクニック試験・伴奏演習について
2)	ヨーロッパの地理	西欧の海や河川、山脈の位置と、西欧諸国とその首都、音楽史上著名都市の地図上の位置。
3)	古典派までの概観	時代区分と代表的な作曲家、特徴。声楽の時代から器楽へ。
4)	J.S.バッハ	教会と世俗、フーガと組曲（舞曲）、対比性。
5)	バロック期その他	Haendel、Couperin、Rameau 等。
6)	前古典派	表現過多様式とギャラント様式。
7)	J.Haydn	生涯と作品。エステハージ家、動機による展開。
8)～10)	W.A.Mozart	生涯と作品。ザルツブルグとウィーン、協奏曲。
11)～14)	L.v.Beethoven	生涯と作品。思想の表出、楽器の発達と作風(時代)の変化、
15)	まとめ	
16)	ロマン派以降概観	時代区分・様々な主義と代表的な作曲家、特徴。
17)～18)	F.Schubert	生涯と作品。シューベルティアーデ、歌曲におけるピアノ。
19)～21)	F.Chopin	生涯と作品。大規模な小品、舞曲、ジョルジュ・サンド。
22)～24)	R.Schumann	生涯と作品。連作小品集、ダヴィット同盟、クララ。
25)～28)	F.Liszt	生涯と作品。巨匠主義、宗教との関わり、2人の女性。
29)	後期実技試験について	カレッジチョイス、他
30)	まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

プリントを適宜配布するので、特に必要ない。

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	90			10	
ヨーロッパ地理の把握	○			○	
主要な作曲家の生涯の理解	○			○	
主要な作曲家の鍵盤作品の整理	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

配布するプリントの【まとめておこう】を等を使い、単元毎必ず復習してまとめておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

単位認定には、前後期の試験共に概ね 50%以上の得点がある等、知識のバランスも考慮する。
尚、欠席回数が授業回数の3分の1以上ある場合は、試験の受験を認めない。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽実践Ａ（管弦打）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆、野津如弘、竹内英美子

Ⅰ　主題
管弦打楽器それぞれの楽器の特色の違いを学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標
1.各楽器の特性や機能について学習することにより、個々のアンサンブル能力の向上を計る。
2.実際に楽器を取り扱っての演習を行い、演奏と音楽上の基礎知識を高めていく。
3.2 年次開講の音楽実践 B と同時開講で行うので、上級生の助言を積極的に取り入れることが望ましい。

Ⅲ　授業の概要
A.ウインドオーケストラ B.フルートを中心とした室内楽 C.弦楽器を中心とした室内楽
（上記 A.B.C.間において、学生は適宜移動して授業を受講する）

Ⅳ　授業計画と内容
※学生の理解度、到達度によって以下の計画は変更されることもある。

項目		内容
1.	授業説明	年間予定、成績評価方法についての説明、教材としての楽譜準備
2～4.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 A.B
4～6.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 C.D
7～9.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 E.F
10～11.	合奏	楽曲練習 A.B.C
12～13.	合奏	楽曲練習 D.E.F
14～15.	合奏	前期授業における総まとめを行う。
16～19.	合奏	楽曲練習 G.H
20～22.	合奏	楽曲練習 I.J
23～26.	合奏	楽曲練習 K.L
27～28.	合奏	楽曲練習 G.H.I.J
29～30.	合奏	楽曲練習 K.L.　総まとめを行い、定期演奏会を実施する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲を教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
演奏会で行う楽曲は、教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
合奏への理解と技術				○	
合奏におけるコミュニケーション				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
演奏会を欠席の場合には基本的に単位を与えない。授業計画はあくまで目安である。急遽演奏会等が入ることにより、授業運営・日程・時間に変更が生じることがある。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽実践Ｂ（声楽）		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

薩川美和子

Ⅰ　主題

曲の内容を理解し、時代背景や様々な要素を考慮して歌う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.言葉の意味と音楽を結び付けて歌うことができる。
2.歌唱・演技に必要な基本的な表現力を身につける。
3.舞台マナーを習得する。

Ⅲ　授業の概要

演習形式により、歌曲、オペラ、ミュージカルについての知識を深め、演奏表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目		内　容
1	ガイダンス１	選曲
2	オペラ・ミュージカルの鑑賞	舞台マナー、表現法など研究する
3－7	音楽稽古	楽曲の練習
8－14	立ち稽古	演技付きで実践的に稽古する
15	発表（第１回）	
16	ガイダンス２	選曲
17－19	諸外国語の発音	発音記号を学ぶ
20－21	朗読	詩を原語で朗読する
22－25	楽曲練習	発音、歌唱法を研究する
26－29	楽曲仕上げ	音楽的表現を追求する
30	発表（第２回）	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

イタリア歌曲集 など

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100		10	50	40	
楽曲に対する理解		○	○	○	
基本的な表現力			○	○	
舞台でのマナーの習得			○	○	
コミュニケーション能力			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

音取りや言葉の発音、意味調べは、各自事前に行うこと。
立ち稽古は暗譜すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

アンサンブルは大人数での演習です。欠席は、基本的に認めません。
また、立ち稽古の服装を考えること。場にそぐわない場合は、退室を命じます。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽実践Ｂ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**2**	**高瀬健一郎**

Ⅰ　主題

楽譜から様々なことを読みとり、どんな風に表現したいのかを考える「作品解釈」のために必要な基礎知識を、各時代の様式や演奏習慣、社会情勢を含めて得ることが主題である。

Ⅱ　授業の到達目標

1.音楽史にとって主要な都市を始めとするヨーロッパの地理を学び、把握する
2.主な作曲家の生涯を学び、概略を説明できる
3.主な作曲家の主なピアノ作品の整理し、概略を説明できることを到達目標とする

Ⅲ　授業の概要

作曲家毎にその生涯とピアノ作品についての知識や、各時代の様式等の理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1)	ガイダンス	授業の説明、テクニック試験・伴奏演習について
2)	ヨーロッパの地理	西欧の海や河川、山脈の位置と、西欧諸国とその首都、音楽史上著名都市の地図上の位置。
3)	古典派までの概観	時代区分と代表的な作曲家、特徴。声楽の時代から器楽へ。
4)	J.S.バッハ	教会と世俗、フーガと組曲（舞曲）、対比性。
5)	バロック期その他	Haendel、Couperin、Rameau 等。
6)	前古典派	表現過多様式とギャラント様式。
7)	J.Haydn	生涯と作品。エステハージ家、動機による展開。
8)～10)	W.A.Mozart	生涯と作品。ザルツブルグとウィーン、協奏曲。
11)～14)	L.v.Beethoven	生涯と作品。思想の表出、楽器の発達と作風(時代)の変化、
15)	まとめ	
16)	ロマン派以降概観	時代区分・様々な主義と代表的な作曲家、特徴。
17)～18)	F.Schubert	生涯と作品。シューベルティアーデ、歌曲におけるピアノ。
19)～21)	F.Chopin	生涯と作品。大規模な小品、舞曲、ジョルジュ・サンド。
22)～24)	R.Schumann	生涯と作品。連作小品集、ダヴィット同盟、クララ。
25)～28)	F.Liszt	生涯と作品。巨匠主義、宗教との関わり、2人の女性。
29)	後期実技試験について	カレッジチョイス、他
30)	まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

プリントを適宜配布するので、特に必要ない。

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（筆記試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	90			10	
ヨーロッパ地理の把握	○			○	
主要な作曲家の生涯の理解	○			○	
主要な作曲家の鍵盤作品の整理	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

配布するプリントの【まとめておこう】を等を使い、単元毎必ず復習してまとめておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

単位認定には、前後期の試験共に概ね 50%以上の得点がある等、知識のバランスも考慮する。
尚、欠席回数が授業回数の3分の1以上ある場合は、試験の受験を認めない。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
音楽実践Ｂ（管弦打）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、野津如弘、竹内英美子

Ⅰ　主題

管弦打楽器それぞれの楽器の特色の違いを学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.各楽器の特性や機能について学習することにより、個々のアンサンブル能力の向上を計る。
2.実際に楽器を取り扱っての演習を行い、演奏と音楽上の基礎知識を高めていく。
3.1 年次開講の音楽実践 A と同時開講で行うので、下級生への助言を積極的に行うことが望ましい。

Ⅲ　授業の概要

A.ウインドオーケストラ B.フルートを中心とした室内楽 C.弦楽器を中心とした室内楽
（上記 A.B.C.間において、学生は適宜移動して授業を受講する）

Ⅳ　授業計画と内容

※学生の理解度、到達度によって以下の計画は変更されることもある。

	項　目	内　容
1.	授業説明	年間予定、成績評価方法についての説明、教材としての楽譜準備
2～ 4.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 A.B
5～ 6.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 C.D
7～ 9.	合奏	基礎合奏ならびに楽曲練習 E.F
10～11.	合奏	楽曲練習 A.B.C
12～13.	合奏	楽曲練習 D.E.F
14～15.	合奏	前期授業における総まとめを行う。
16～19.	合奏	楽曲練習 G.H
20～22.	合奏	楽曲練習 I.J
23～26.	合奏	楽曲練習 K.L
27～28.	合奏	楽曲練習 G.H.I.J
29～30.	合奏	楽曲練習 K.L.　総まとめを行い、定期演奏会を実施する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲を教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

演奏会で行う楽曲は、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100				100	
合奏への理解と技術				○	
合奏におけるコミュニケーション				○	
演奏会への準備				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前に充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

演奏会を欠席の場合には基本的に単位を与えない。授業計画はあくまで目安である。急遽演奏会等が入ることにより、授業運営・日程・時間に変更が生じることがある。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
演奏会演習Ａ		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

塚本一実、井上幸子、仲戸川智隆

Ⅰ　主題

演奏会を開催するために必要な知識と技術を習得し、将来、自らが演奏会を企画、構成、実施することができる力を身につける。また、実際に学内で開催される演奏会の運営に携わり、実践を通して現場対応力を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.演奏会を企画構成をし、必要物を作成する事が出来るようになる
2.演奏会の予算決算書を書けるようになり、マネージメントする事ができるようになる
3.実際の学内演奏会運営進行を経験し、演奏会現場での対応ができるようになる

Ⅲ　授業の概要

習得した演奏技術を披露するためには、演奏会の場を自らの手で企画し運営する力も身につける必要がある。この授業では、学生が将来自分の力で演奏会を開催したいと考えた時のために、どのような事務的作業が存在し、それらをこなすためにはどのような力が必要かを知り、計画的に自ら企画構成し、ひとつの演奏会を運営する力を体得することを目的としている。そのための様々な知識と技術を、実践を交えて学んでいく。

Ⅳ　授業計画と内容

	項目	内容
1	オリエンテーション	演奏会の種類について学ぶ。グループ分けをして企画への準備。
2～ 3	企画 Ⅰ	演奏会の企画、会場の選定、演奏者、曲目の選定
4～ 5	企画 Ⅱ	演奏会の予算決算書の書き方を学ぶ
6～ 7	企画 Ⅲ	チラシ、プログラムなど配布物の作成
8～ 9	企画 Ⅳ	著作権申請、広告、後援申請
10～12	企画 Ⅴ	グループ企画発表、提出
13～15	模擬演習	実習の係分担や配置を決め、学内オーディションで運営を体験する
16～18	実習 Ⅰ	学内の演奏会を運営する(音楽科定期演奏会)
19～21	実習 Ⅱ	学内の演奏会を運営する(専攻別演奏会(管弦打)
22～24	実習 Ⅲ	学内の演奏会を運営する(専攻別演奏会(ピアノ・声楽)
25～27	実習 Ⅳ	学内の演奏会を運営する(卒業演奏会)
28～30	実習 Ⅴ	学内の演奏会を運営する(修了演奏会)

Ⅴ　使用テキスト・教材等

適宜プリントを配布

Ⅵ　参考書・参考資料

ホール資料や各種チラシ

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験 ( )	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他 (実践)
配点比率(%)　合計 100%		20	30	50	
演奏会企画力			○		
演奏会実践力				○	
フィードバックする力		○			

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

県にどのようなホールがあるか興味を持ち、演奏会を通して音響や建物の状況を把握しておくこと。コンサートに使われる楽器について、興味を持ち、特性などをよく調べておくこと。コンサート会場にあるチラシなどを集めておき、作成する側の観点から日頃興味を持っておくこと

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

仮想演奏会は、小グループによる話し合いと作業が中心になるので、欠席についてはグループメンバーへ十分配慮すること。資料を一人が抱えてグループ作業に支障がでないようにすること。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
演奏会演習Ｂ		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

塚本一実、井上幸子、仲戸川智隆

Ⅰ　主題

演奏会を開催するために必要な知識と技術を習得し、将来、自らが演奏会を企画、構成、実施することができる力を身につける。また、実際に学内で開催される演奏会の運営に携わり、実践を通して現場対応力を学ぶ。

Ⅱ　授業の到達目標

1.演奏会を企画構成をし、必要物を作成する事が出来るようになる
2.演奏会の予算決算書を書けるようになり、マネージメントする事ができるようになる
3.実際の学内演奏会運営進行を経験し、演奏会現場での対応ができるようになる

Ⅲ　授業の概要

習得した演奏技術を披露するためには、演奏会の場を自らの手で企画し運営する力も身につける必要がある。この授業では、学生が将来自分の力で演奏会を開催したいと考えた時のために、どのような事務的作業が存在し、それらをこなすためにはどのような力が必要かを知り、計画的に自ら企画構成し、ひとつの演奏会を運営する力を体得することを目的としている。そのための様々な知識と技術を、実践を交えて学んでいく。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1	オリエンテーション	演奏会の種類について学ぶ。グループ分けをして企画への準備。
2～ 3	企画 Ⅰ	演奏会の企画、会場の選定、演奏者、曲目の選定
4～ 5	企画 Ⅱ	演奏会の予算決算書の書き方を学ぶ
6～ 7	企画 Ⅲ	チラシ、プログラムなど配布物の作成
8～ 9	企画 Ⅳ	著作権申請、広告、後援申請
10～12	企画 Ⅴ	グループ企画発表、提出
13～15	模擬演習	実習の係分担や配置を決め、学内オーディションで運営を体験する
16～18	実習 Ⅰ	学内の演奏会を運営する(音楽科定期演奏会)
19～21	実習 Ⅱ	学内の演奏会を運営する(専攻別演奏会(管弦打)
22～24	実習 Ⅲ	学内の演奏会を運営する(専攻別演奏会(ピアノ・声楽)
25～27	実習 Ⅳ	学内の演奏会を運営する(卒業演奏会)
28～30	実習 Ⅴ	学内の演奏会を運営する(修了演奏会)

Ⅴ　使用テキスト・教材等

適宜プリントを配布

Ⅵ　参考書・参考資料

ホール資料や各種チラシ

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験 ( )	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他 (実践)
配点比率(%)　合計 100%		20	30	50	
演奏会企画力			○		
演奏会実践力				○	
フィードバックする力		○			

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

県にどのようなホールがあるか興味を持ち、演奏会を通して音響や建物の状況を把握しておくこと。コンサートに使われる楽器について、興味を持ち、特性などをよく調べておくこと。コンサート会場にあるチラシなどを集めておき、作成する側の観点から日頃興味を持っておくこと

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

仮想演奏会は、小グループによる話し合いと作業が中心になるので、欠席についてはグループメンバーへ十分配慮すること。資料を一人が抱えてグループ作業に支障がでないようにすること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
インターンシップ		**1**	**音**	**1**	**井上幸子**

Ⅰ 主題

音楽の学びを通して社会人としての職業意識を育て、社会での実践を通じて自分の将来像を描き、人生設計の基礎を固める。社会に出てから求められるスキル（学習手法、分析方法、課題解決法、プロジェクトマネジメント、チームワーク、コミュニケーション、プレゼンテーション）を能動的に学ぶ。

Ⅱ 授業の到達目標

1.卒業後の職業選択能力を高める。
2.社会人として求められるスキルを高める。
3.音楽と人生の関わりについて人生設計をするための能力を高める。

Ⅲ 授業の概要

PBL 型のインターンシップ。PBL とは Project-based learning（プロジェクト型学習）もしくは Problem-based learning（課題解決型学習）と呼ばれ、学生自身が主体となり、企業、地域、教員、などと連携し、課題の解決に向けて、チームを作り協力して取り組む学習内容である。従って、学生の自律的かつ主体的な動きが求められる。本授業では、静岡市の中心市街地活性化に取り組む「I Love しずおか協議会」と連携し、中心市街地が抱える課題の抽出及び解決に取り組む活動を通し、街の現状及び

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. ガイダンス（学内）	社会人として必要な言葉遣いや挨拶、職業意識、マナーを学ぶ。

2～15. 地域連携プロジェクト(PBL)型セミナー

企業とは何かを学び、社会の仕組みと求める人材像を学ぶ。学生グループによるフィールドワーク、協議会の企業人による直接指導、成果報告会での研究発表。

Ⅴ 使用テキスト・教材等

適宜配布

Ⅵ 参考書・参考資料

授業内で指示

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

学習項目＼成績評価方法	試験（　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100		20	30	50	
自己 PR の方法				○	
企業との社会勉強における主体的な学び			○		
マナー習得		○			

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

＊「I love しずおか協議会」についての予備知識を各自が事前に持っておくこと。
＊グループワークが主体となるため、他者に迷惑をかけぬよう、体調管理に努め、遅刻や欠席の無い規律ある生活を日頃意識すること。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

＊ 研修に必要な諸経費（交通費、飲食費）は自己負担。研修は、毎週水曜日 18:45 より静岡商工会議所（予定）
＊ このプロジェクトに参加する学生は、8 月上旬に行われる企業ガイダンスに参加必須。
＊総合音楽専攻は履修を必須とする。

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
早期音楽教育法		**3**	**音**	**2**	**井上幸子**

Ⅰ　主題

音楽教育に必要な指導法、レッスン実践法を学び、部活動での指導もできるようになる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.音楽教師を目指す学生を対象に、早期音楽教育の指導法、レッスン実践法を研究することにより、実際に対応できる指導能力の向上を目指す。
2.教則本、メソードを学びその特徴を考える。
3.即興力、初見力、読譜力

Ⅲ　授業の概要

様々なメソードの教材の紹介を折り込みながら、教師・先生としての心構え、音楽をいかに教えるか、演奏技術を具体的にどのように指導するかを考える。

Ⅳ　授業計画と内容

前期

	項目	内容
1	音楽教育について心得	楽器指導者の心構えや、部活動の意義について。
2	指導時の言葉の使い方	指導する時の言葉遣いや、成果に導く言葉掛けについて。
3	呼吸法指導	身体の効果的な使い方に基づく呼吸指導について。
4	初心者への指導	各楽器の構え方や口の作り方の指導について。
5	発音指導	正しい発音指導について。
6～ 7	実習1	学校現場での中学生指導。
8	音程指導	個人、またはグループでの音程指導について。
9	基礎練習指導	各楽器に効果的なウォーミングアップメニューについて。
10～11	実習2	学校現場での中学生指導。
12～13	曲指導	コンクール課題曲パート譜を用いた、読譜と技術指導について。
14～15	実習3	学校現場での中学生指導。

後期

16～18	アレクサンダー・テクニックについて	他者に教授する上での考え方や技法について。
19～20	アンサンブル指導	少人数のアンサンブルの指導について
21～22	実習4	学校現場での中学生指導
23～24	吹奏楽指導計画	計画を持った吹奏楽指導ができるように学ぶ。
25～26	合奏指導	大人数での合奏指導について。
27～29	実習5	学校現場での中学生指導。
30	まとめ	学習のまとめ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

適宜、担当教員が決定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

テキスト、教材などを適宜、担当教員が決定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（模擬レッスン）	小レポート	学習態度		
配点比率(%)　合計 100	40	40	20		
研究態度、課題への好奇心、研究心			○		
実習への取り組み		○			
レッスン実践、発表力	○				

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

＊効果的な指導を導くために、日頃の自己鍛錬時間にも、客観的な指導視野を意識する。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

＊中学校現場での実習になるため、日常生活態度から総合的に判断し、指導者としての資質に問題があると判断した場合は、受講を辞退させることもある。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
リトミックⅠ		**2**	**音**	**1**	**和波真実**

Ⅰ 主題

リトミック指導をする上での基礎的な、リズム運動・ピアノ演奏法・指導法(3歳児)を習得する。

Ⅱ 授業の到達目標

1.リズム:リズムを表現する基礎的な動きができるようになること。
2.ピアノ演奏:リズム指導における基礎的なピアノ演奏法ができること。
3.指導法:3歳児指導法の年間カリキュラムを把握してそれを実践できること。

Ⅲ 授業の概要

リトミックを指導する上での基礎的な、リズム運動・ピアノ演奏法・指導法(3歳児)を習得し、子どもたちがリトミックに興味を持ち、好きになり、感動体験ができるような、楽しさに包まれた指導力を身につける。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
第 1回 リズム運動(1)	リトミック説明と導入
第 2回 リズム運動(2)	基礎的な動き(強弱・テンポ・空間・アクセント)
第 3回 リズム運動(3)	基礎リズム(1)2拍子
第 4回 リトミックのためのピアノ演奏法(1)	3歳児保育1学期
第 5回 指導法(1)	3歳児保育1学期
第 6回 リトミックのためのピアノ演奏法(2)	3歳児保育2学期
第 7回 指導法(2)	3歳児保育2学期
第 8回 リズム運動(4)	拍子
第 9回 指導法(3)	3歳児保育3学期
第10回 リトミックのためのピアノ演奏法(3)	3歳児保育3学期
第11回 リズム運動(5)	基礎リズム(2)3拍子・4拍子
第12回 指導法(4)	3歳児指導法総括1～3学期
第13回 リズム運動(6)	リズムカノン(導入)
第14回 リトミックのためのピアノ演奏法(4)	3歳児保育1～3学期
第15回 リトミック理論	リトミックの理論とダルクローズについて(1)
第16回 試験	2級資格認定試験

Ⅴ 使用テキスト・教材等

幼稚園・保育園のためのリトミック／3歳児用	1500 円	※金額は税抜き価格です。
カラーボード	600 円	
スティック	300 円	
指導資格認定試験リズム課題練習 CD	1400 円	

Ⅵ 参考書・参考資料

リトミックってなあに	岩崎光弘	ドレミ楽譜出版
リズムと音楽と教育	エミール・ジャック＝ダルクローズ	全音楽譜出版社

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他( )
配点比率(%) 合計 100	70	0	0	30	0

Ⅷ 授業時間外の学習(予習・復習等)

実技に必要な練習をしておくこと

Ⅸ その他(履修上の注意、前提条件等)

体を動かす授業です。動きやすい服装で、底の薄いシューズ(バレエシューズ等、裸足も可)を用意して出席してください。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
リトミックⅡ		**2**	**音**	**1**	**和波真実**

Ⅰ　主題

リトミック指導をする上での基礎的な、リズム運動・ピアノ演奏法・指導法（4歳児及び5歳児）を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標

1.リズム：リズムを表現する基礎的な動きができるようになること。
2.ピアノ演奏：リズム指導における基礎的なピアノ演奏法ができること。
3.指導法：4歳児及び5歳児指導法の年間カリキュラムを把握してそれを実践できること。

Ⅲ　授業の概要

リトミックを指導する上での基礎的な、リズム運動・ピアノ演奏法・指導法（4歳児及び5歳児）を習得し、子どもたちがリトミックに興味を持ち、好きになり、感動体験ができるような、楽しさに包まれた指導力を身につける。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
第 1回 指導法(1)	4歳児保育1学期
第 2回 指導法(2)	4歳児保育2学期
第 3回 リズム運動(1)	リズムカノン(1)3拍子
第 4回 リトミックのためのピアノ演奏法(1)	4歳児保育1学期～2学期
第 5回 指導法(3)	4歳児保育3学期
第 6回 指導法(4)	5歳児保育1学期
第 7回 リズム運動(2)	リズムカノン(2)3拍子・4拍子　複リズム(1)
第 8回 リトミックのためのピアノ演奏法(2)	4歳児保育3学期、5歳児保育1学期
第 9回 指導法(5)	5歳児保育2学期(2)
第10回 指導法(6)	5歳児保育3学期
第11回 リズム運動(3)	リズムカノン(3)3・4拍子　複リズム(2)
第12回 指導法(7)	4・5歳児指導法総括
第13回 リズム運動(4)	リズムカノン(4)3・4拍子　複リズム(3)
第14回 リトミックのためのピアノ演奏法(3)	5歳児保育2学期～3学期
第15回 リトミック理論	リトミックの理論とダルクローズについて(2)
第16回 試験	1級資格認定試験

Ⅴ　使用テキスト・教材等

幼稚園・保育園のためのリトミック／4歳児用	1800 円	※金額は税抜き価格です。
幼稚園・保育園のためのリトミック／4歳児用	1800 円	
リズムカード(2 拍子・3 拍子)	500 円	

Ⅵ　参考書・参考資料

リトミックってなあに	岩崎光弘	ドレミ楽譜出版
リズムと音楽と教育	エミール・ジャック＝ダルクローズ	全音楽譜出版社

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法／学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	70	0	0	30	0

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

実技に必要な練習をしておくこと

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

体を動かす授業です。動きやすい服装で、底の薄いシューズ（バレエシューズ等、裸足も可）を用意して出席してください。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
音楽科教育法		**2**	**音**	**1**	**井上幸子**

Ⅰ 主題

この授業は中学校教諭二種「音楽」免許取得のための必修科目である。

Ⅱ 授業の到達目標

1.指導要領を通して音楽教育について学び、音楽科教員としての基礎知識と技術を習得する。
2.教員に求められる基礎力(人前で話す力、自分の考えを持つ力、時間を組み立てる力、文書作成力、行事を運営する力など)を身につける。
3.教育現場のみならず、社会に適応できる基礎力を身につける。

Ⅲ 授業の概要

この授業は、教員による講義、学生による模擬授業、模擬授業に対する学生同志のフィードバック(グループディスカッション)で構成される

Ⅳ 授業計画と内容

項目・内容

1. 教職課程履修上の心得・音楽教育略史
2. これからの中等科音楽・音楽科の課題
3. 学習指導要領解説①「目標」
4. 学習指導要領解説②「内容:A.表現」
5. 学習指導要領解説③「内容:B.鑑賞」
6. 学習指導要領解説④「指導計画作成と内容の取扱い」
7. 学習指導要領解説⑤「共通事項」
8. 教育課程の定義
9. 指導計画①「年間指導計画」
10. 指導計画②「学習指導案作成法 1」
11. 指導計画③「学習指導案作成法 2」
12. 評価①「教育評価概論」
13. 評価②「観点」
14. 評価③「方法」
15. 前半まとめ・第Ⅰ期教育実習心構え
16. 授業実践①「青年期の発達特性・教材研究の視点」
17. 授業実践②「歌唱」
18. 授業実践③「器楽」
19. 授業参観・第Ⅱ期教育実習心構え
20. 授業実践④「創作」
21. 授業実践⑤「鑑賞」「表現と鑑賞の関連」
22. (教育実習)個人指導:教材研究①
23. (教育実習)個人指導:教材研究②
24. (教育実習)個人指導:教材研究③
25. 日本の伝統音楽
26. 諸外国の音楽
27. ポピュラー音楽
28. 校種間・他教科・特別活動との連携
29. 特色ある音楽教育法
30. 総まとめ

Ⅴ 使用テキスト・教材等

中等科音楽教育法	中等科音楽教育研究会	音楽之友社	9784276820173
音楽のおくりもの 中学音楽1、2・3(上下)、中学器楽		教育出版	
中学生の音楽1、2・3(上下)、中学生の器楽		教育芸術社	
音楽教育の実践		教育芸術社	9784877881085
中学校学習指導要領解説・音楽編	文部科学省	教育芸術社	9784877883904
世界の歌声		教育芸術社	

Ⅵ 参考書・参考資料

クラス内で指示する。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	指導案	模擬授業	学習態度	その他
配点比率(%) 合計 100		40	40	20	
授業実践			○	○	
授業案の書き方の理解		○			
指導要領の理解		○	○		
教職の心得				○	

Ⅷ 授業時間外の学習(予習・復習等)

初回授業時に説明。提出物に関しては、厳しく臨む。

Ⅸ その他(履修上の注意、前提条件等)

ピアノの弾き歌いができることが必須条件となるため、各自練習を怠らないこと。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
指揮法		〔1〕	**音**	**1**	**野津如弘**

Ⅰ　主題

前半は、斉藤秀雄『指揮法教程』を基に拍子の取り方、図形の描き方など指揮法の基礎の習得、後半は応用編として、過去の吹奏楽コンクール課題曲などを通して、実践的な音楽表現としての指揮法の習得を目的とする。加えて、指揮者として現場に立った時に欠かせない演奏者とのコミュニケーションの取り方、リハーサルの進め方など総合的能力も会得できるよう学習させる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.図形の描き方、叩き・しゃくい・平均運動・先入といった指揮法の基礎的テクニックを習得できる。
2.それらテクニックを組み合わせ、実際の曲に応用できるようになる。
3.リハーサルにおいて、自分が表現したい音楽を効率的に演奏者に伝えることができるようになる。

Ⅲ　授業の概要

受講者全員で簡易オーケストラを編成し、それを順番に指揮する形で行なう。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.叩き　2拍子3拍子	ﾌﾞﾙｸﾞﾐｭｰﾗｰ〈25 番〉より《2・ｱﾗﾍﾞｽｸ》《5・無邪気》
2.しゃくい　4拍子	シューベルト〈アンプロンプチュ〉
3.平均運動　3拍子	ウェーバー　変奏曲
4.先入　4拍子	ハイドン　アンダンテ
5.打法・直接運動他・1	ハイドン　アレグロ
6.打法・直接運動他・2	ベートーヴェン交響曲第1番・Ⅱ楽章
7.6拍子の振り方	クーラウ　ソナチネ
8.ワルツ叩き	〈美しく青きドナウ〉
9.応用編・1	過去の吹奏楽コンクール課題曲から
10.応用編・2	過去の吹奏楽コンクール課題曲から
11.応用編・3	過去の吹奏楽コンクール課題曲から
12.応用編・4	過去の吹奏楽コンクール課題曲から
13.応用編・5	合唱曲の指揮法
14.応用編・6	合唱曲の指揮法
15.まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指揮法教程．改訂新版　斉藤秀雄著　音楽之友社　2010　9784276141100

Ⅵ　参考書・参考資料

完本　指揮法入門　高階正光著　音楽之友社　2001　97842761410

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（授業内実技）
配点比率(%)　合計 100	30			30	40
指揮の技術	○			○	○
基礎テクニックの応用力・実践	○			○	○
演奏者とのコミュニケーション能力	○			○	○

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

コンサートやDVD、オーケストラの中継番組等で、実際に指揮者がどう振っているかを、広範囲に学習しておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

指揮棒は初回授業時に購入（PICKBOY FTS-150I）。また、専攻の楽器がある者はそれぞれ持参すること。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
作曲・編曲法		**2**	**音**	**2**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

この科目は、音楽科専門科目の中では選択科目であるが、教職課程及び音楽療法課程においては必修科目である。旋律の構造を捉え、そこにハーモニーをつける。小学校・中学校で用いられている歌曲を分析し、2 部形式による歌曲を作ることを到達目標とする

Ⅱ　授業の到達目標

1.非和声音の把握をし、活用できるようになる。
2.リート形式の把握をし、活用できるようになる。
3.分析したことを活用し、作品を創作できるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた創作力を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	基礎知識Ⅰ	コードネーム
2.	基礎知識Ⅱ	和音の把握Ⅰ（和音記号、変質和音）
3.	基礎知識Ⅲ	和音の把握Ⅱ（減七和音）、非和声音
4.	基礎知識Ⅳ	リート形式について
5.	歌唱教材の分析	小学校で使われている歌唱教材Ⅰ
6.	歌唱教材の分析	小学校で使われている歌唱教材Ⅱ
7.	歌唱教材の分析	小学校で使われている歌唱教材Ⅲ
8.	歌唱教材の分析	中学校で使われている歌唱教材Ⅰ
9.	歌唱教材の分析	中学校で使われている歌唱教材Ⅱ
10.	歌唱教材の分析	高校で使われている歌唱教材の分析
11.	2 部形式の歌曲の創作	学生が創って来たものについての指導Ⅰ
12.	2 部形式の歌曲の創作	学生が創って来たものについての指導Ⅱ
13.	2 部形式の歌曲の創作	学生が創って来たものについての指導Ⅲ
14.	2 部形式の歌曲の創作	学生が創って来たものについての指導Ⅳ
15.	2 部形式の歌曲の創作	学生が創って来たものについての指導Ⅴ

Ⅴ　使用テキスト・教材等

授業でその都度配布する

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100			50	50	
非和声音の把握			○	○	
リート形式の把握			○	○	
分析の活用と創作			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

その時に興味を持った作品の楽譜を熟読する

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
伴奏法		〔1〕	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

楽曲の構造を知る。教員や音楽療法士を目指す学生に必要な、メロディー線に伴奏を付けることのみならず、いろいろな楽曲に伴奏を着けられるようになることを到達目標とする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.メロディーラインやベースラインの把握をし、伴奏付けができるようになる。
2.その曲の雰囲気を作る伴奏形を発見し、伴奏付けができるようになる。
3.その曲の個性を作るコードの把握をし、伴奏付けができるようになる。

Ⅲ　授業の概要

授業内で身につけた技術を実技レッスン等に発展させる。

Ⅳ　授業計画と内容

1.イントロダクション
2.ライン:メロディーラインとベースラインの把握
3.和音:コードネームと和音記号の把握
4.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度の伴奏譜を書く(簡易伴奏)Ⅰ
5.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度の伴奏譜を書く(簡易伴奏)Ⅱ
6.発表Ⅰ:前回までに作った楽曲を演奏する(できる学生は移調奏)
7.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな伴奏譜を書くⅠ
8.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな伴奏譜を書くⅡ
9.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな伴奏譜を書くⅢ
10.発表Ⅱ:前回までに作った楽曲を演奏する(できる学生は移調奏)
11.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな弾き歌い譜を書くⅠ
12.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな弾き歌い譜を書くⅡ
13.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな弾き歌い譜を書くⅢ
14.伴奏譜:各自の演奏能力に応じた難易度による一番華やかな弾き歌い譜を書くⅣ
15.発表Ⅲ:前回までに作った楽曲を演奏する(できる学生は移調奏)

Ⅴ　使用テキスト・教材等

授業内に配布

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験 ( )	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他 ( )
配点比率(%)　合計 100			50	50	
無伴奏合唱曲からハーモニーを読み取る			○	○	
コードネームの把握			○	○	
コード進行の把握			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

今までに接してきた楽曲の前奏、間奏、後奏を即興で弾けるようにする

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽合奏（リコーダー）		〔2〕	**音**	**1**	**片平雅子**

Ⅰ　主題
この授業では、教職に必要な楽器であるリコーダーの基礎的な奏法を習得して合奏に慣れる事を主題とする。

Ⅱ　授業の到達目標
1.リコーダーの種類とその音域並びに楽器各部の名称を理解する。
2.リコーダーの奏法を習得し、適切に演奏できるようになる。
3.合奏ができるようになる。

Ⅲ　授業の概要
教育実習と教員採用試験に向けてアルトリコーダーの奏法を習得し、合奏を行う。

Ⅳ　授業計画と内容
この授業は、リコーダーの奏法を基礎から習得し、合奏ができるようになる。

項　目	内　容
1. リコーダーについて	リコーダーの種類、音域、楽器各部の名称 等
2. 奏法1	姿勢、構え方等、奏法の基礎
3. 奏法2	中音域（ソからド）の運指とタンギング
4. 奏法3	低音域（最低音ファからド）の運指とタンギング
5. 奏法4	サミングと高音域の運指
6. 奏法5	アーティキュレーション
7. 奏法6	長調の音階練習と、2～3人のアンサンブル練習1
8. 奏法7	短調の音階練習と、2～3人のアンサンブル練習2
9. 合奏1	アルトリコーダーによる合奏1
10.合奏2	アルトリコーダーによる合奏2と、ジャーマン式とバロック式の運指法等
11.合奏3	ソプラノとアルトリコーダーによる合奏 1
12.合奏4	ソプラノ、アルト、テノール、バスリコーダーによる合奏1
13.合奏5	ソプラノ、アルト、テノール、バスリコーダーによる合奏2
14.合奏6	合奏 3 と、少人数グループのアンサンブル練習
15.合奏7　まとめ	合奏 4 と、少人数グループのアンサンブル発表も含む

Ⅴ　使用テキスト・教材等
授業内で適宜指示、または資料を配布する。

Ⅵ　参考書・参考資料
絶対うまくなるリコーダー100 のコツ　　吉澤実　　(株)ヤマハミュージックメディア

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　）
配点比率(%)　合計 100		10	20	70	
種類、音域、各部名称の理解		○		○	
奏法の習得			○	○	
合奏、グループ発表			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
吹けなかった部分を練習しておくこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
＊アルトリコーダーを毎回持参する。
＊2 年前期で履修する「器楽合奏(箏)」の評定と合算したものが最終評定となる。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽合奏（箏）		〔2〕	**音**	**2**	**石渡裕子**

Ⅰ　主題

この授業では、日本の和楽器である「箏」についての知識を深め、演奏技術を取得するものである。

Ⅱ　授業の到達目標

1.箏のしくみを理解し、和楽器としての説明が出来るようになる。
2.箏の演奏技法について学び、実際に演奏出来るようになる。
3.さらに箏の知識を利用して、他の楽器＜洋楽器＞との応用が出来るようになる。

Ⅲ　授業の概要

箏の基本的な奏法を習得するために、箏のしくみを理解させながら、前半では個人での演奏を、後半では全体での合奏を中心に進めて行く。

Ⅳ　授業計画と内容

項　目	内　容
1.箏の部位の説明と楽譜の読み方	実際に箏に触れ、音を出す。
2.練習1・2	爪をつけて演奏する。
3.テキスト「数え唄」「さくら」	楽譜を読みながら実際に曲を弾く。
4.テキスト「数え唄」合奏	演奏手法スクイ、ツキ色等の実技。
5.テキスト「数え唄」合奏	演奏手法の復習と確認。
6.テキスト「さくら」合奏	合わせ爪、割り爪等の実技。
7.テキスト「さくら」合奏	演奏手法の復習と確認。
8.テキスト「花かげ・子守唄・花嫁人形」	休符、カキテ、スタッカート等の実技。
9.テキスト「花かげ」合奏	演奏手法の復習と確認。
10.テキスト「子守唄」「花嫁人形」合奏	左手の手法、ピチカート等の実技
11.テキスト「子守唄」「花嫁人形」合奏	演奏手法の復習と確認。
12.テキスト「ひな祭り」	調弦の変化と演奏。
13.テキスト「ひな祭り」合奏	演奏手法の復習と確認。
14.テキスト「荒城の月」合奏	押し手、グリッサンド等の練習。
15.まとめ	和楽器「箏」の集大成。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

おことはじめ　平調子編　　水野利彦　　大日本家庭音楽会

Ⅵ　参考書・参考資料

特になし

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 ／ 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100%	50			50	
箏の演奏技術の理解度	○			○	
授業内容を理解すること	○			○	
授業の参加				○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業中のスマホメール等、授業に関係ない行動をしないこと。
正座等邦楽を奏するに相応しい授業態度であること。
1 年後期に履修する「器楽合奏(リコーダー)」の評定と合算したものが最終評定となる。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
声楽Ａ		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

小林教子、佐藤典子、萩原明美、横山靖代

Ⅰ　主題
詩の理解を深め、基礎的な声楽技能を習得し、演奏を向上させる。

Ⅱ　授業の到達目標
1.基礎的な舞台語発音を習得する。
2.自然な発声に必要な体の機能を理解し、実践する。
3.詩の内容を読み解き、音楽と一体化し表現する。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、基礎的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内容
1. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
2. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
3. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
4. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
5. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
6. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
7. コンコーネ(I)	声楽的発声の実践
8. イタリア歌曲などの歌唱(I)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. イタリア歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
10. イタリア歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
11. イタリア歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
12. イタリア歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. イタリア歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. イタリア歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他( )
配点比率(%)　合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
声楽Ｂ		〔2〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

小林教子、佐藤典子、萩原明美、横山靖代

Ⅰ　主題

詩の理解を深め、基礎的な声楽技能を習得し、演奏を向上させる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.基礎的な舞台語発音を習得する。
2.自然な発声に必要な体の機能を理解し、実践する。
3.詩の内容を読み解き、音楽と一体化し表現する。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンにより、基礎的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
2. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
3. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
4. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
5. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
6. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
7. コンコーネ(II)	声楽的発声の実践
8. イタリア歌曲などの歌唱(II)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. イタリア歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
10. イタリア歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
11. イタリア歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
12. イタリア歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. イタリア歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. イタリア歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
声楽C		〔2〕	音	2	岩下晶子

佐藤典子、横山靖代

Ⅰ 主題

詩の理解を深め、基礎的な声楽技能を習得し、演奏を向上させる。

Ⅱ 授業の到達目標

1.基礎的な舞台語発音と内容表現を結び付ける。
2.自然で豊かな発声を探求し、実践する。
3.詩の内容を深く読み解き、楽曲分析と合わせ、積極的に表現する。

Ⅲ 授業の概要

個人レッスンにより、基礎的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ 授業計画と内容

項目	内容
1. 日本歌曲(I)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
2. 日本歌曲(I)	歌唱練習
3. 日本歌曲(I)	歌唱練習
4. 日本歌曲(I)	歌唱練習
5. 日本歌曲(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. 日本歌曲(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
7. 日本歌曲(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
8. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
10. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
11. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	歌唱練習
12. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. 外国語の歌曲などの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ 使用テキスト・教材等

声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
ドイツ歌曲集
日本歌曲集
など

Ⅵ 参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他( )
配点比率(%) 合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
声楽Ｄ		〔2〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

佐藤典子、横山靖代

Ⅰ　主題

詩の理解を深め、基礎的な声楽技能を習得し、演奏を向上させる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.基礎的な舞台語発音と内容表現を結び付ける。
2.自然で豊かな発声を探求し、実践する。
3.詩の内容を深く読み解き、楽曲分析と合わせ、積極的に表現する。

Ⅲ　授業の概要

個人レッスンにより、基礎的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
2. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
3. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
4. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	歌唱練習
5. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
6. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
7. 外国語の歌曲などの歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
8. オペラアリアなどの歌唱(I)	朗読、楽曲分析、歌唱練習
9. オペラアリアなどの歌唱(I)	歌唱練習
10. オペラアリアなどの歌唱(I)	歌唱練習
11. オペラアリアなどの歌唱(I)	歌唱練習
12. オペラアリアなどの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
13. オペラアリアなどの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14. オペラアリアなどの歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15. まとめ	

Ⅴ　使用テキスト・教材等

声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
ドイツ歌曲集
オペラアリア集
など

Ⅵ　参考書・参考資料

指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
内容把握・表現	○			○	
発声	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。
生演奏や録音などをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ａ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**1**	**小林秀子**

高瀬健一郎、安間秋津、沖教仁、吉永哲道

Ⅰ　主題
ピアノ作品に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.テクニック試験を通して基礎演奏能力の向上を目指す。
2.古典派以前 のピアノ作品を取り上げ、表現された作品の内容、作曲家の人間像、時代背景等を理解し、演奏技術を学び、個々の音楽表現力を深めていく
3.古典派の様式を踏まえた上で自分なりの表現を考えそれに必要なテクニックを身に付けるよう努力していく事を目標とする。

Ⅲ　授業の概要
個別実技レッスン形態により基礎的な音楽表現をぶ。

Ⅳ　授業計画と内容
項目　　内　容
1.　面談　前期に取り上げる課題曲についての説明と選曲。
レッスン時間の設定。レッスン時間の設定。
テクニック試験の課題と試験方法、レッスンノートの記入上の注意。
2～ 4.　練習曲を中心にレッスンを進める。音階、アルペジュオ、半音階、
オクターヴの確認し、テクニック試験の準備。
5～ 8.　個別演奏表現の向上、ベートーヴェン以前の古典派の様式。
9～15.　実技試験準備　演奏会場を念頭においた練習方法、演奏法。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
コースや学生の進度にあわせて適宜、担当教員が決定する。
演奏コース
1. 複旋律の作品（Bach）
2. 練習曲2曲
3. L.v.Beethoven 以前（L.v.Beethoven を含まない）の作曲家の作品よりソナタ、変奏曲、ロンドより一曲。
専門コース・総合コース
1. 練習曲（1 曲もしくは2曲）
2. L.v.Beethoven 以前（L.v.Beethoven を含まない）の作曲家の作品よりソナタ（速い楽章）、変奏曲、ロンドより一曲。
試験では最初に複旋律の曲より演奏する。

Ⅵ　参考書・参考資料
適宜、担当教員が決定・指示する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術・内容	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術内容の理解	○	○		○	

尚、テクニック試験1回不合格の場合は 5%を、2 回不合格の場合は 10%を減点する。
欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、あるいは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
課題となる楽曲の練習をレッスン準備として充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
マンツーマンの形態で指導するが、より多くの作品、アドヴァイスに触れるため、一組で受講する。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ａ（管楽器）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、塚本陽子、長瀬正典、矢辺新太郎
小島光博、中川忍、星野舞子、小久保まい

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.基礎的な技術習得のために必要な、有効な練習方法の導入を行う。
2.機械的な技術習得のみならず音楽的表現や音色の変化に対応できるように学習する。
3.実技試験にむけて計画的な準備を行う。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2.	基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のため
3.	〃	の有効な練習方法の確立することを目的に、授業を行う。
4.	〃	
5.	個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。
6.	〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。
7.	〃	
8.	実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.	〃	
10.	〃	
11.	実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に
12.	〃	進める。無伴奏ならばその限りではない。
13.	〃	
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、7 分前後以内に収まることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ａ（弦楽器）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

竹内英美子

Ⅰ　主題
各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.基礎的な技術習得のために必要な、有効な練習方法の導入を行う。
2.機械的な技術習得のみならず音楽的表現や音色の変化に対応できるように学習する。
3.実技試験にむけて計画的な準備を行う。

Ⅲ　授業の概要
実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2.	基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のため
3.	〃	の有効な練習方法の確立することを目的に、授業を行う。
4.	〃	
5.	個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。
6.	〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。
7.	〃	
8.	実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.	〃	
10.	〃	
11.	実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に
12.	〃	進める。無伴奏ならばその限りではない。
13.	〃	
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
学期末実技試験における楽曲演奏時間は、7 分前後以内に収まることが望ましい。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ａ（打楽器）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

山本晶子

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.基礎的な技術習得のために必要な、有効な練習方法の導入を行う。
2.機械的な技術習得のみならず音楽的表現や音色の変化に対応できるように学習する。
3.実技試験にむけて計画的な準備を行う。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1.	面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2.	基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のため
3.	〃	の有効な練習方法の確立することを目的に、授業を行う。
4.	〃	
5.	個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。
6.	〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。
7.	〃	
8.	実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.	〃	
10.	〃	
11.	実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に
12.	〃	進める。無伴奏ならばその限りではない。
13.	〃	
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、7 分前後以内に収まることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ｂ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**1**	**小林秀子**

高瀬健一郎、安間秋津、沖教仁、吉永哲道

Ⅰ　主題
ピアノ作品に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.テクニック試験を通して基礎能力の向上を目指す.
2.ロマン派のピアノ作品を中心に、表現された作品の内容、作品の様式、作曲家の人間像時代背景等を理解し、演奏技術を学び、個々の音楽表現力を深めていく。
3.学校指定の課題曲では、自分自身の力で理解し、解釈し、演奏表現や練習方法を考える力を養う。

Ⅲ　授業の概要
個別実技レッスン形態により基礎的な音楽表現をぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1～ 8.	演奏表現	平均率について、ポリフォニーにつて、バッハの鍵盤作品、カンタービレとは、ルバートとは、メロディ、ハーモニー伴奏とのバランス、初見演奏、ロマン　派の作品、ペダル、リズム、音色、形式などを学ぶ。
9～15.	実技試験準備	演奏会場を念頭においた演奏・練習方法。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
コースや学生の進度にあわせて楽曲、練習曲、練習課題などを適宜、担当教員が決定する。
演奏コース
1.複旋律の作品（バッハ、ヘンデル、スカルラッティ、ラモー）、
2.ロマン派の作品（7分～15分程度）、
3.学校指定の課題曲
専門コース・総合コース
1.複旋律の作品　但し、「前奏曲とフーガ」のように組みとして作曲された作品の場合は、プレリュード、又はフーガのみを抜粋してはならない。
2.ロマン派の作品を一曲以上。但しその一曲は-cantilena-styleの作品、もしくはcantilenaである部分を含む作品。
3.学校指定の課題曲。
※試験では、はじめに復旋律の作品、最後に学校指定の課題曲を演奏する。

Ⅵ　参考書・参考資料
コースや学生の進度にあわせて適宜、担当教員が決定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術・内容	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術内容の理解	○	○		○	

尚、テクニック試験1回不合格の場合は 5%を、2 回不合格の場合は 10%を減点する。
欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、あるいは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
課題となる楽曲の練習をレッスン準備として充分に行うこと。¥

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
マンツーマンの形態で指導するが、より多くの作品、アドヴァイスに触れるため、一組で受講する。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ｂ（管楽器）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子、仲戸川智隆**

仲戸川智隆、古川はるな、塚本陽子、長瀬正典、矢辺新太郎
小島光博、中川忍、星野舞子、小久保まい

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「器楽 A」より継続性のある授業内容を行う。
2.全調にわたる音階を演奏できるように中間試験までに完全に習得する。
3.学期末実技試験で希望者はコース変更を申し出ることが出来る。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

	項　目	内　容
1.	基礎能力の向上	前期から継続性ある授業内容で一層の基礎能力向上を計る。
2.	〃	
3.	〃	
4.	基礎能力向上＆中間試験	試験準備を見据えて各学生の進度・コースに
5.	〃	あった授業を行う。場合により練習曲の有効
6.	〃	な活用を計る。中間試験準備としてスケー
7.	〃	ルならびにエチュードの完全な習得を行う。
8.	実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.	〃	
10.	〃	
11.	実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
12.	〃	無伴奏ならばその限りではない。
13.	〃	
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
演奏技術の習得	○	○		○	
スケール・エチュード		○		○	
音楽的表現	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、10 分前後以内に収まることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ｂ（弦楽器）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

竹内英美子

Ⅰ　主題
各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.「器楽 A」より継続性のある授業内容を行う。
2.全調にわたる音階を演奏できるように中間試験までに完全に習得する。
3.学期末実技試験で希望者はコース変更を申し出ることが出来る。

Ⅲ　授業の概要
実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容
※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

	項　目	内　容
1.	基礎能力の向上	前期から継続性ある授業内容で一層の基礎能力向上を計る。
2.	〃	
3.	〃	
4.	基礎能力向上＆中間試験	試験準備を見据えて各学生の進度・コースに
5.	〃	あった授業を行う。場合により練習曲の有効
6.	〃	な活用を計る。中間試験準備としてスケー
7.	〃	ルならびにエチュードの完全な習得を行う。
8.	実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.	〃	
10.	〃	
11.	実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
12.	〃	無伴奏ならばその限りではない。
13.	〃	
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
演奏技術の習得	○	○		○	
スケール・エチュード		○		○	
音楽的表現	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
学期末実技試験における楽曲演奏時間は、10 分前後以内に収まることが望ましい。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ｂ（打楽器）		〔2〕	**音**	**1**	**井上幸子**

山本晶子

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「器楽 A」より継続性のある授業内容を行う。
2.全調にわたる音階を演奏できるように中間試験までに完全に習得する。
3.学期末実技試験で希望者はコース変更を申し出ることが出来る。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

	項　目	内　容
1.	基礎能力の向上	前期から継続性ある授業内容で一層の基礎能力向上を計る。
2.	〃	
3.	〃	
4.	基礎能力向上＆中間試験	試験準備を見据えて各学生の進度・コースに
5.	〃	あった授業を行う。場合により練習曲の有効
6.	〃	な活用を計る。中間試験準備としてスケー
7.	〃	ルならびにエチュードの完全な習得を行う。
8.	実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.	〃	
10.	〃	
11.	実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
12.	〃	無伴奏ならばその限りではない。
13.	〃	
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
演奏技術の習得	○	○		○	
スケール・エチュード		○		○	
音楽的表現	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、10 分前後以内に収まることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽C（ピアノ）		〔2〕	音	2	小林秀子

高瀬健一郎、安間秋津

Ⅰ 主題

ピアノ作品を取り組み、ピアノ演奏に必要な技術を習得する。

Ⅱ 授業の到達目標

1.テクニック試験を通して基礎演奏能力の向上を目指す。
2.ベートーヴェンのピアノソナタを取り上げ、ソナタ形式、表現された作品の内容、作曲家の人間像、時代背景等を理解し、演奏技術を学び、個々の音楽表現力を深めていく。
3.それぞれが作品を解釈し、自分なりの表現を考え、それに必要なテクニックや練習方法を考え、演奏を仕上げていく事を目標とする。

Ⅲ 授業の概要

個別実技レッスン形態により基礎的な音楽表現をぶ。

Ⅳ 授業計画と内容

1～ 8. 演奏表現　ソナタ形式について、近・現代曲の作品について、拍子と拍感、リズム、タッチ、音色、バランス、ペダル、ベートーヴェンのピアノソナタ作品、オーケストレーション
9～15. 実技試験準備　演奏会場を念頭においた演奏・練習方法。

Ⅴ 使用テキスト・教材等

コースや学生の進度にあわせて楽曲、練習曲、練習課題などを適宜、担当教員が決定する。

演奏コース
1.ベートーヴェンのピアノソナタ（全楽章）、
2.印象派、スペイン、アメリカ、ロシア、又は現代の作曲家の作品。（10分程度）

専門コース・総合コース
1.ベートーヴェンの作品より、ピアノソナタの速い楽章、変奏曲、又はロンドより一曲。
但し、1年前期にロンドか変奏曲を演奏した場合は、ソナタを選択すること。
2.ロマン派、印象派、近現代の作曲家の作品より一曲。

Ⅵ 参考書・参考資料

コースや学生の進度にあわせて楽曲、練習曲、練習課題などを適宜、担当教員が決定する。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

学習項目＼成績評価方法	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術・内容	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術的内容の理解	○	○		○	

尚、テクニック試験1回不合格の場合は 5%を、2 回不合格の場合は 10%を減点する。
欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、あるいは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

課題となる楽曲の練習をレッスン準備として充分に行うこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

マンツーマンの形態で指導するが、より多くの作品、アドヴァイスに触れるため、一組で受講する。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ｃ（管楽器）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、佐藤慶子、長瀬正典、中川忍

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「器楽 A」「器楽 B」より継続性のある授業を行う。
2.基礎的能力の一層の拡充を計る。
3.機械的な技術だけではなく、和声の進行を理解して演奏できるよう試みる。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項　目	内　容
1. 面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2. 基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のための有効な練習方法の確立
3. 〃	することを目的に、授業を行う。
4. 〃	
5. 個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。
6. 〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。
7. 〃	
8. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9. 〃	
10. 〃	
11. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
12. 〃	無伴奏ならばその限りではない。
13. 〃	
14. 〃	
15. 〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、10 分前後以内に収まることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ｃ（弦楽器）		〔2〕	音	2	井上幸子

竹内英美子

Ⅰ　主題
各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.「器楽 A」「器楽 B」より継続性のある授業を行う。
2.基礎的能力の一層の拡充を計る。
3.機械的な技術だけではなく、和声の進行を理解して演奏できるよう試みる。

Ⅲ　授業の概要
実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容
※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項目	内容
1. 面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2. 基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のための有効な練習方法の確立
3. 〃	することを目的に、授業を行う。
4. 〃	
5. 個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。
6. 〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。
7. 〃	
8. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9. 〃	
10. 〃	
11. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
12. 〃	無伴奏ならばその限りではない。
13. 〃	
14. 〃	
15. 〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
学期末実技試験における楽曲演奏時間は、10 分前後以内に収まることが望ましい。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ｃ（打楽器）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

山本晶子

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「器楽 A」「器楽 B」より継続性のある授業を行う。
2.基礎的能力の一層の拡充を計る。
3.機械的な技術だけではなく、和声の進行を理解して演奏できるよう試みる。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項　目	内　容
1. 面談	レッスン曜日時間の設定、取り上げていく曲目、教材、練習曲についての相談。
2. 基礎能力向上	基礎的な技術を発展するとともに、音楽的表現のための有効な練習方法の確立
3.　〃	することを目的に、授業を行う。
4.　〃	
5. 個別能力向上	試験準備を見据えて学生の進度にあった授業を行う。
6.　〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。
7.　〃	
8. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
9.　〃	
10.　〃	
11. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
12.　〃	無伴奏ならばその限りではない。
13.　〃	
14.　〃	
15.　〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	90			10	
演奏技術の習得	○			○	
演奏における表現	○			○	
芸術的内容の理解	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、10 分前後以内に収まることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ｄ（ピアノ）		〔2〕	**音**	**2**	**小林秀子**

高瀬健一郎、安間秋津

Ⅰ　主題
ピアノ作品に取り組み、ピアノ演奏に必要な技術を習得する。

Ⅱ　授業の到達目標
1.テクニック試験を通して基礎演奏能力の向上を目指す。
2.様々な時代の音楽言語で書かれたピアノ作品に取組み、表現された作品の内容や背景、作曲家の人間像等を理解した上で自分なりに作品解釈ができるように努める。
3.個々が音楽表現力を深めるために必要なテクニックを探り、練習方法を考え、演奏を仕上げていく事を目標とする。

Ⅲ　授業の概要
個別実技レッスン形態により基礎的な音楽表現をぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

	項　目	内　容
1～ 8.	演奏表現	古典から近現代の作品を通じて、演奏法の特色を学ぶ。 演奏する曲の解釈、作曲家、時代背景
9～15.	実技試験準備	演奏会場を念頭においた演奏・練習方法。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
コースや学生の進度にあわせて楽曲、練習曲、練習課題などを適宜、担当教員が決定する。

演奏コース
1.自身の自由な選択による。但し、異なる作曲家で2曲以上の作品を演奏する。

専門コース・総合コース
1.複旋律の作品。作曲家の制限はない。但し、「平均率クラヴィア曲集」のプレリュードとフーガのように組みになっている作品はどちらかを抜粋してはならない。
2.自由な選択による作品を1曲以上。
※試験でははじめに復旋律の作品を演奏する。

Ⅵ　参考書・参考資料
コースや学生の進度にあわせて適宜、担当教員が決定する。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
ピアノの演奏技術・内容	○	○		○	
演奏様式への理解と探究心	○	○		○	
芸術的内容の理解	○	○		○	
その他は、授業時間外欄参照					

尚、テクニック試験1回不合格の場合は 5%を、2 回不合格の場合は 10%を減点する
欠席回数が授業回数の 3 分の 1 以上ある場合、或いは、期末試験の際、自分の演奏順に会場にいなかった場合は、受験を認めない。

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
課題となる楽曲の練習をレッスン準備として充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
マンツーマンの形態で指導するが、より多くの作品、アドゥヴァイスに触れるため、一組で受講する。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ｄ（管楽器）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

仲戸川智隆、古川はるな、佐藤慶子、長瀬正典、中川忍

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「器楽Ｃ」より継続性のある授業を実施し、短大２年間の集大成を行う。
2.全調にわたる音階を演奏できるように中間試験までに完全に習得する。
3.和声感、様式感を伴った音楽表現を行う。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項　目	内　容
1.　基礎能力の向上	前期から継続性ある授業内容で一層の基礎能力向上を計る。
2.　〃	
3.　〃	
4.　基礎能力向上＆中間試験	試験準備を見据えて各学生の進度・コースにあった授業を行う。
5.　〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。中間試験準備としてスケール
6.　〃	ならびにエチュードの完全な習得を行う。
7.　〃	
8.　〃	
9.　実技試験準備１	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
10.　〃	
11.　〃	
12.　実技試験準備２	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
13.　〃	無伴奏ならばその限りではない。
14.　〃	
15.　〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
演奏技術の習得	○	○		○	
スケール・エチュード		○		○	
音楽的表現	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、12 分以内に収まることが望ましい。
成績優秀者には卒業演奏会に出演の機会を与える。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
器楽Ｄ（弦楽器）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

竹内英美子

Ⅰ　主題
各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.「器楽Ｃ」より継続性のある授業を実施し、短大２年間の集大成を行う。
2.全調にわたる音階を演奏できるように中間試験までに完全に習得する。
3.和声感、様式感を伴った音楽表現を行う。

Ⅲ　授業の概要
実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容
※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

	項　目	内　容
1.	基礎能力の向上	前期から継続性ある授業内容で一層の基礎能力向上を計る。
2.	〃	
3.	〃	
4.	基礎能力向上＆中間試験	試験準備を見据えて各学生の進度・コースにあった授業を行う。
5.	〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。中間試験準備としてスケール
6.	〃	ならびにエチュードの完全な習得を行う。
7.	〃	
8.	〃	
9.	実技試験準備１	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
10.	〃	
11.	〃	
12.	実技試験準備２	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
13.	〃	無伴奏ならばその限りではない。
14.	〃	
15.	〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等
各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料
試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
演奏技術の習得	○	○		○	
スケール・エチュード		○		○	
音楽的表現	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
学期末実技試験における楽曲演奏時間は、12 分以内に収まることが望ましい。
成績優秀者には卒業演奏会に出演の機会を与える。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
器楽Ｄ（打楽器）		〔2〕	**音**	**2**	**井上幸子**

山本晶子

Ⅰ　主題

各楽器の演奏技術を深め、高度な音楽的表現を行う。

Ⅱ　授業の到達目標

1.「器楽 C」より継続性のある授業を実施し、短大 2 年間の集大成を行う。
2.全調にわたる音階を演奏できるように中間試験までに完全に習得する。
3.和声感、様式感を伴った音楽表現を行う。

Ⅲ　授業の概要

実技レッスンを中心に音楽的教養と理解を深める。

Ⅳ　授業計画と内容

※個人差があるため、下記の授業計画は、あくまで目安である。

項　目	内　容
1. 基礎能力の向上	前期から継続性ある授業内容で一層の基礎能力向上を計る。
2. 〃	
3. 〃	
4. 基礎能力向上＆中間試験	試験準備を見据えて各学生の進度・コースにあった授業を行う。
5. 〃	場合により練習曲の有効な活用を計る。中間試験準備としてスケール
6. 〃	ならびにエチュードの完全な習得を行う。
7. 〃	
8. 〃	
9. 実技試験準備 1	実技試験のための準備を中心とした授業を行う。
10. 〃	
11. 〃	
12. 実技試験準備 2	実技試験のために、ピアノ伴奏者とのあわせを中心に進める。
13. 〃	無伴奏ならばその限りではない。
14. 〃	
15. 〃	総仕上げを行う。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

各学生の進度に適した楽曲や練習曲、音階などを教員が指定、または作成して使用する。

Ⅵ　参考書・参考資料

試験曲は、実技担当教員と相談の上、自主的に選択することが望ましい。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（実技試験）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	80	10		10	
演奏技術の習得	○	○		○	
スケール・エチュード		○		○	
音楽的表現	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

各楽曲の練習を授業前には充分に行うこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

学期末実技試験における楽曲演奏時間は、12 分前後以内に収まることが望ましい。
成績優秀者には卒業演奏会に出演の機会を与える。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
作品制作Ａ		〔2〕	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

受講者各自の習熟度に合わせて、授業を行う。具体的には、作品の創作、編曲、高度な和声学の学習を主題とする。受講学生数は原則4人までとする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ピアノソロの作品を制作できるようになる。
2.ピアノという楽器についての知識を得る。
3.学生が未経験の作品の形式(3 部形式など)で作品制作ができるようになる。

Ⅲ　授業の概要

学生個々のニーズに沿った、作曲、編曲を個別に行う。自分以外の学生が指導されているときも、同じ部屋で、その指導から自分の学業へ反映させる。

Ⅳ　授業計画と内容

＜項　目＞
1～5　　旋律の創作
6～15　　作品の制作または編曲

＜内　容＞
1～5　　既成作品の分析及び研究
6～14　　個々の学生に対応
15　　制作した作品の発表

Ⅴ　使用テキスト・教材等

分析する作品の楽譜

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　　合計 100			50	50	
ピアノソロの作品を制作できるようになったか。			○	○	
ピアノという楽器についての知識を得ることができたか。			○	○	
学生が未経験の作品の形式(3 部形式など)で作品制作ができるようになったか。			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

作品の視聴、分析、作曲、編曲

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数		学科	年次	担　当　教　員
	必修	選択			
作品制作Ｂ		〔2〕	**音**	**1**	**塚本一実**

Ⅰ　主題

受講者各自の習熟度に合わせて、授業を行う。具体的には、作品の創作、編曲、高度な和声学の学習を主題とする。作品制作Ａに続いて、上記内容をより深める。受講学生数は原則4人までとする。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ピアノと何か一つの楽器による編成の作品を制作できるようになる。
2.ピアノ以外の何か一つの楽器についての知識を得る。
3.学生が未経験の作品の形式（変奏曲など）で作品制作ができるようになる。

Ⅲ　授業の概要

学生個々のニーズに沿った、作曲、編曲を個別に行う。自分以外の学生が指導されているときも、同じ部屋で、
その指導から自分の学業へ反映させる。
楽譜は楽譜制作ソフト（Finale）を使って作ることを原則とする。

Ⅳ　授業計画と内容

＜項　目＞
1～5　　2本の旋律の創作
6～15　　作品の制作（作曲または編曲）

＜内　容＞
1～5　　既成作品の分析及び研究
6～14　　個々の学生に対応
15　　制作した作品の発表

Ⅴ　使用テキスト・教材等

分析する楽譜

Ⅵ　参考書・参考資料

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100			50	50	
ピアノと何か一つの楽器による編成の作品を制作できるようになったか。			○	○	
ピアノ以外の何か一つの楽器についての知識を得たか。			○	○	
学生が未経験の作品の形式（変奏曲など）で作品制作ができるようになったか。			○	○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

作品の視聴、分析、作曲、編曲。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

楽譜は楽譜制作ソフト（Finale）を所有していることが望ましい。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
基礎声楽Ａ		〔1〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

横山靖代

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.声楽の基礎的な呼吸法を習得する。
2.声楽の基礎的な発声法を習得する。
3.日本語、イタリア語で歌唱する。

Ⅲ　授業の概要
グループ実習により、基礎的な歌唱法を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 呼吸法・発声法	呼吸の練習と発声の姿勢を学ぶ
2. 呼吸法・発声法	呼吸の練習と発声の姿勢を学ぶ
3. 呼吸法・発声法	呼吸の練習と発声の姿勢を学ぶ
4. 呼吸法・発声法	呼吸の練習と発声の姿勢を学ぶ
5. 教則本による歌唱(I)	呼吸と発声の実践
6. 教則本による歌唱(I)	呼吸と発声の実践
7. 教則本による歌唱(I)	呼吸と発声の実践
8. 教則本による歌唱(I)	呼吸と発声の実践
9. 教則本による歌唱(I)	呼吸と発声の実践
10. イタリア歌曲などによる歌唱(I)	イタリア語などを読む練習
11. イタリア歌曲などによる歌唱(I	楽曲分析
12. イタリア歌曲などによる歌唱(I)	歌唱練習
13. イタリア歌曲などによる歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
14. イタリア歌曲などによる歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
15. まとめ	楽曲を暗譜し、演奏する

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
日本歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
一クラスは最大で 12 人までとする。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
基礎声楽Ｂ		〔1〕	**音**	**1**	**岩下晶子**

横山靖代

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.声楽の基礎的な呼吸法を安定させる。
2.声楽の基礎的な発声法を安定させる。
3.日本語、イタリア語を歌唱する。

Ⅲ　授業の概要
グループ実習により、基礎的な歌唱法を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1.　教則本による歌唱(II)	声楽的発声の実践
2.　教則本による歌唱(II)	声楽的発声の実践
3.　教則本による歌唱(II)	声楽的発声の実践
4.　教則本による歌唱(II)	声楽的発声の実践
5.　イタリア歌曲などによる歌唱(II)	朗読、楽曲分析
6.　イタリア歌曲などによる歌唱(II)	歌唱練習
7.　イタリア歌曲などによる歌唱(II)	歌唱練習
8.　イタリア歌曲などによる歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
9.　イタリア歌曲などによる歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
10.　日本歌曲などによる歌唱(I)	朗読、楽曲分析
11.　日本歌曲などによる歌唱(I)	歌唱練習
12.　日本歌曲などによる歌唱(I)	歌唱練習
13.　日本歌曲などによる歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
14.　日本歌曲などによる歌唱(I)	ピアノ伴奏とのアンサンブル
15.　まとめ	楽曲を暗譜し、演奏する

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
トスティ歌曲集
日本歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
一クラスは最大で 12 人までとする。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
基礎声楽C		〔1〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

小林教子

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.詩の表現と音楽表現を結び付けて演奏する。
2.日本語、イタリア語などの歌詞を明瞭に発音する。
3.明るく響き、伸びのある声で歌唱する。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、基礎的な声楽表現を学ぶ

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 教則本による歌唱(III)	声楽的発声の実践
2. 教則本による歌唱(III)	声楽的発声の実践
3. 教則本による歌唱(III)	声楽的発声の実践
4. 教則本による歌唱(III)	声楽的発声の実践
5. イタリア歌曲などによる歌唱(III)	朗読、楽曲分析
6. イタリア歌曲などによる歌唱(III)	歌唱練習
7. イタリア歌曲などによる歌唱(III)	歌唱練習
8. イタリア歌曲などによる歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
9. イタリア歌曲などによる歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
10. 日本歌曲などによる歌唱(II)	朗読、歌曲分析。
11. 日本歌曲などによる歌唱(II)	歌唱練習
12. 日本歌曲などによる歌唱(II)	歌唱練習
13. 日本歌曲などによる歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
14. 日本歌曲などによる歌唱(II)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
15. まとめ	楽曲を暗譜し、演奏する

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
ドイツ歌曲集
日本歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他の学生のレッスンをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
基礎声楽Ｄ		〔1〕	**音**	**2**	**岩下晶子**

小林教子

Ⅰ　主題
言葉と音楽による有機的な表現を培う。

Ⅱ　授業の到達目標
1.詩の内容と歌唱旋律、ピアノ伴奏を結び付けて歌唱する。
2.各言語の特性を理解し、歌詞を明瞭に意味を持って発音する。
3.明るく響き、伸びのある声を磨く。

Ⅲ　授業の概要
個人レッスンにより、基礎的な声楽表現を学ぶ。

Ⅳ　授業計画と内容

項目	内　容
1. 日本歌曲などによる歌唱(III)	朗読、楽曲分析
2. 日本歌曲などによる歌唱(III)	歌唱練習
3. 日本歌曲などによる歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
4. 日本歌曲などによる歌唱(III)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
5. イタリア歌曲などによる歌唱(IV)	朗読、楽曲分析
6. イタリア歌曲などによる歌唱(IV)	歌唱練習
7. イタリア歌曲などによる歌唱(IV)	歌唱練習
8. イタリア歌曲などによる歌唱(IV)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
9. イタリア歌曲などによる歌唱(IV)	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
10. ドイツ歌曲などによる歌唱	朗読、楽曲分析
11. ドイツ歌曲などによる歌唱	歌唱練習
12. ドイツ歌曲などによる歌唱	歌唱練習
13. ドイツ歌曲などによる歌唱	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
14. ドイツ歌曲などによる歌唱	ピアノ伴奏とのアンサンブル練習
15. まとめ	楽曲を暗譜し、演奏する

Ⅴ　使用テキスト・教材等
声楽教則本(コンコーネ 50 番など)
イタリア歌曲集
日本歌曲集
ドイツ歌曲集
など

Ⅵ　参考書・参考資料
指導教員が指示する

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験(実技試験)	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他(　　)
配点比率(%)　合計 100	70			30	
発声	○			○	
内容把握・表現	○			○	
予習・復習	○			○	

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）
音楽や、言葉の発音・意味を事前によく学習し、繰り返し練習すること。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）
他の学生のレッスンをよく聴き、幅広く音楽感を養うこと。

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
基礎ピアノＡ		〔1〕	**音**	**1**	**高瀬健一郎**

安間秋津

Ⅰ　主題

自分の専攻では見慣れない大譜表に慣れ、音階を把握して調性感覚を養う。
旋律と伴奏の両方を自分自身で担当することにより、バランス、和声感覚などを考える。
強弱や速度、音色を工夫しながら、自分なりの演奏表現ができる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ハ長調とイ短調(和声的・旋律的)の音階とカデンツを演奏できる。
2.平易な楽曲をピアノで演奏できる。
3.演奏の際、音質に配慮し、強弱や速度、音色の工夫ができる。

Ⅲ　授業の概要

スケールとカデンツは、ハノンの 39 番にある形を基本とするが、到達度や手の大きさ等を考慮し、より安易な配置を選択して構わない。
楽曲は、到達度を考慮して選択する。その際、主科専攻や取得を目指す資格に関連するものを選んでも良い。

Ⅳ　授業計画と内容

1)	ガイダンス	曲決め。レッスンの進め方と、レッスンノートの記入方法について。
2)～5)	譜読み	調号や臨時記号、音価の読み違えに注意し、正確に譜を読む。 遅くても良いので、一定の速度を保って弾けるようにする。
6)～10)	表現	両手で一定の速度で弾ける事が目標。 旋律線の跳躍から「音程」を実体として感じ取ったり、 調性の変化や特徴的な和音に注目し、それらの意図を考える。 そしてその「自分の感覚」をどのように表現するかを考えていく。
11)～15)	仕上げ 試験	暗譜で演奏できる事が目標。 弾き歌いを除き、スケールとカデンツ、楽曲のいずれも暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験 ( )	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他 ( )
配点比率(%)　合計 100	0	0	100	0	0
音階とカデンツの演奏			○		
楽曲のピアノ演奏			○		
楽曲の弾き歌い			○		

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

課題となる楽曲について、個人練習を充分に積んで授業に臨むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
基礎ピアノＢ		〔1〕	**音**	**1**	**高瀬健一郎**

安間秋津

Ⅰ　主題

自分の専攻では見慣れない大譜表に慣れ、音階を把握して調性感覚を養う。
旋律と伴奏の両方を自分自身で担当することにより、バランス、和声感覚などを考える。
強弱や速度、音色を工夫しながら、自分なりの演奏表現ができる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.ト長調、ヘ長調とその平行調（和声的・旋律的）の音階とカデンツを演奏できる。
2.ソナチネ程度の楽曲をピアノで演奏できる。
3.演奏の際、音質に配慮し、強弱や速度、音色の工夫ができる。

Ⅲ　授業の概要

スケールとカデンツは、ハノンの 39 番にある形を基本とするが、到達度や手の大きさ等を考慮し、より安易な配置を選択して構わない。
楽曲は、到達度を考慮して選択する。その際、主科専攻や取得を目指す資格に関連するものを選んでも良い。

Ⅳ　授業計画と内容

1)	ガイダンス	曲決め。レッスンの進め方と、レッスンノートの記入方法について。
2)～5)	譜読み	調号や臨時記号、音価の読み違えに注意し、正確に譜を読む。 遅くても良いので、一定の速度を保って弾けるようにする。
6)～10)	表現	両手で一定の速度で弾ける事が目標。 旋律線の跳躍から「音程」を実体として感じ取ったり、 調性の変化や特徴的な和音に注目し、それらの意図を考える。 そしてその「自分の感覚」をどのように表現するかを考えていく。
11)～15)	仕上げ	暗譜で演奏できる事が目標。
	試験	弾き歌いを除き、スケールとカデンツ、楽曲のいずれも暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	0	0	100	0	0
音階とカデンツの演奏			○		
楽曲のピアノ演奏			○		
楽曲の弾き歌い			○		

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

課題となる楽曲について、個人練習を充分に積んで授業に臨むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）

授業科目名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担当教員
基礎ピアノC		〔1〕	**音**	**2**	**小林秀子**

石川晴恵

Ⅰ 主題

自分の専攻では見慣れない大譜表に慣れ、音階を把握して調性感覚を養う。
旋律と伴奏の両方を自分自身で担当することにより、バランス、和声感覚などを考える。
強弱や速度、音色を工夫しながら、自分なりの演奏表現ができる。

Ⅱ 授業の到達目標

1.ニ長調、変ロ長調とその平行調(和声的・旋律的)の音階とカデンツを演奏できる。
2.ソナチネ程度の楽曲をピアノで演奏できる。
3.演奏の際、音質に配慮し、強弱や速度、音色の工夫ができる。

Ⅲ 授業の概要

スケールとカデンツは、ハノンの 39 番にある形を基本とするが、到達度や手の大きさ等を考慮し、より安易な配置を選択して構わない。
楽曲は、到達度を考慮して選択する。その際、教員採用試験受験予定者は、その試験での課題曲を学習する。

Ⅳ 授業計画と内容

1)	ガイダンス	曲決め。レッスンの進め方と、レッスンノートの記入方法について。
2)〜5)	譜読み	調号や臨時記号、音価の読み違えに注意し、正確に譜を読む。 遅くても良いので、一定の速度を保って弾けるようにする。
6)〜10)	表現	両手で一定の速度で弾ける事が目標。 旋律線の跳躍から「音程」を実体として感じ取ったり、 調性の変化や特徴的な和音に注目し、それらの意図を考える。 そしてその「自分の感覚」をどのように表現するかを考えていく。
11)〜15)	仕上げ 試験	暗譜で演奏できる事が目標。 弾き歌いを除き、スケールとカデンツ、楽曲のいずれも暗譜で演奏する。

Ⅴ 使用テキスト・教材等

指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ 参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ 成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験 ( )	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他 ( )
配点比率(%)　合計 100	0	0	100	0	0
音階とカデンツの演奏			○		
楽曲のピアノ演奏			○		
楽曲の弾き歌い			○		

Ⅷ 授業時間外の学習（予習・復習等）

課題となる楽曲について、個人練習を充分に積んで授業に臨むこと。

Ⅸ その他（履修上の注意、前提条件等）

授　業　科　目　名	単位数 必修	単位数 選択	学科	年次	担　当　教　員
基礎ピアノＤ		〔1〕	**音**	**2**	**小林秀子**

石川晴恵

Ⅰ　主題

自分の専攻では見慣れない大譜表に慣れ、音階を把握して調性感覚を養う。
旋律と伴奏の両方を自分自身で担当することにより、バランス、和声感覚などを考える。
強弱や速度、音色を工夫しながら、自分なりの演奏表現ができる。

Ⅱ　授業の到達目標

1.イ長調、変ホ長調とその平行調（和声的・旋律的）の音階とカデンツを演奏できる。
2.ソナチネ程度の楽曲をピアノで演奏できる。
3.演奏の際、音質に配慮し、強弱や速度、音色の工夫ができる。

Ⅲ　授業の概要

スケールとカデンツは、ハノンの 39 番にある形を基本とするが、到達度や手の大きさ等を考慮し、より安易な配置を選択して構わない。
楽曲は、到達度を考慮して選択する。その際、主科専攻や取得を目指す資格に関連するものを選んでも良い。

Ⅳ　授業計画と内容

1)	ガイダンス	曲決め。レッスンの進め方と、レッスンノートの記入方法について。
2)～5)	譜読み	調号や臨時記号、音価の読み違えに注意し、正確に譜を読む。 遅くても良いので、一定の速度を保って弾けるようにする。
6)～10)	表現	両手で一定の速度で弾ける事が目標。 旋律線の跳躍から「音程」を実体として感じ取ったり、 調性の変化や特徴的な和音に注目し、それらの意図を考える。 そしてその「自分の感覚」をどのように表現するかを考えていく。
11)～15)	仕上げ	暗譜で演奏できる事が目標。
	試験	弾き歌いを除き、スケールとカデンツ、楽曲のいずれも暗譜で演奏する。

Ⅴ　使用テキスト・教材等

指導教員が場合に応じて指定する。

Ⅵ　参考書・参考資料

特に必要ない。

Ⅶ　成績評価の方法及び基準

成績評価方法 / 学習項目	試験（　　）	小テスト・小レポート	成果発表・作品	学習態度	その他（　　）
配点比率(%)　合計 100	0	0	100	0	0
音階とカデンツの演奏			○		
楽曲のピアノ演奏			○		
楽曲の弾き歌い			○		

Ⅷ　授業時間外の学習（予習・復習等）

課題となる楽曲について、個人練習を充分に積んで授業に臨むこと。

Ⅸ　その他（履修上の注意、前提条件等）